
あなたの匂いが嗅ぎたいっ！

ころみごや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたの匂いが嗅ぎたいっ！

【Nコード】

N7529X

【作者名】

ころみこや

【あらすじ】

高校進学のために地元を離れて上京した釣枝比念は、居候先となる古ぼけた骨董屋にて、架織乃姉妹の訓夏と胡桃の二人と再会する。昔交わした約束を憶えていなかったことに腹を立てる妹の訓夏と、人をからかうことを生きがいとするかのような性格をしている姉の胡桃、この二人と共に一つ屋根の下で暮らしていくことになった。だが、妹の訓夏には、とある秘密があつて――…。

【0・0】

わたしは——…、

「——××が、好きです」

あの日以来、ずっと好きなんです。

二人きりで誓い合い、繰り返し繰り返し確かめてみました。
そばにいただけで、わたしの全てをくらくらにするほどに好きなんです。

「——××が、忘れられません」

忘れるはずがありません。

いつも、いつでも、いつだって、わたしは憶えています。
たとえ離れ離れになったとしても、忘れることなんてできるはずがありません。

「——××が、恋しくて我慢できません」

一秒でも早く、欲しいんです。

心も体も何もかも全てを奪われてしまうほどの存在感が、愛おしくてたまりません。
時には我慢しなければならぬことを恐れ、それがとても哀しくて泣きそうになります。

でも、わたしは——…、

「——××が、好きです」

誓い合った言葉に嘘や偽りはありません。
この想いを叶えるために、ずっとずっと、言葉にして伝え続ける
ことを約束します。

……そう、わたしは、あなたの――

「――匂いが、大好きです」

【1・1】

『とつとくたばれ、この変態紳士ッ』

まず、否定させてもらうけど、オレは別に変態ではない。それを踏まえた上であえて言わせてもらうわけだが、変態と言う名の紳士淑女に罪はない。憎むべきは変態的な存在を糾弾するべきであると声も高々に言つてのける自称変態ではない人々と、その意見に何ら疑問を抱くこともなく同調してしまうような、如何にも周囲の空気に流されやすい愚かな奴らだけなんだ、と口早に説明してみた。

その結果、もれなく同じクラスの女の子（仮にHさんと名づけよう）から急所に蹴りを戴き、ついではばかりに嫌悪感丸出しの辛辣なお言葉を頂戴したのはまだ記憶に新しい。

確かにHさんは同じクラスの中でも飛びつきりに可愛い女の子であることは言われなくとも理解しているつもりだ。それどころか学年で、いやいやこの学校に通う女生徒全体で見ても頭一つ飛びぬけて可愛いのではないだろうか。オマケに性格も明るく、どんな奴にだって別け隔てなく接してくれる天使のような存在だ。この世に男として生まれたのであれば勿論、たとえそれが彼女と同じ女性であったとしても、是非ともお近づきになりたいと考えるのは当然と言えるだろう。

しかしまあ、だからといって何らかのアクションが起こるのではないかと期待して話しかけたわけでは、決してない。Hさんが恥ずかしそうに俯きながら困っている姿を見てしまったオレが、下心（は多分）無く、善意を持って行動してみたが故の結末が、コレだ。

水泳の授業が終わった後、彼女の下着が無くなったとの噂を耳にしたオレは、Hさんが今現在スカートの下に何も穿いていないのではないかというあからさまにエロい展開が待ち受けていそうな偏った妄想をしつつ、と同時にその悩みをあつという間に解決できるのはオレの他には存在しないであろうことを早々と理解し、早速行動

に移してみる。

それでだ、無事にHさんの下着を見つけ出すまでには至ったわけだが、なんていうべきか、ほんの少しだけ解決を急いたのが原因で、なんとも残念な誤解をされてしまった。

『そ、そこで何してるの……？』

無くなった下着は、女子更衣室にあった。無人の更衣室にお邪魔し、Hさんが使用したと思われるロッカーを開けてみると、二段組になっている棚の裏に引っ掛かっていた。よく見ればすぐに気づくはずなのに、どうやらHさんはおっちょこちよいのようだ。

やれやれ、これで問題解決だな、と思ったのも束の間、後ろから声をかけられて振り向いてみれば、そこにいるのはHさん。そしてその背後には同じクラスの奴らの姿がちらほらと確認できる。……

ああ、死んだな。社会的に存在を抹殺される数秒前、では今からカウントダウン開始です、と愚痴りたい気分だ。

ここで冒頭に戻り、言い訳してみた台詞を口にしてみた甲斐も空しく、僅か半日足らずでオレの変態との公式が校内において正式に認定されることになってしまったわけだ。

いやちよつとまで、Hさんはオレのことをただの変態とは呼ばずに変態紳士と呼んでいたよな。それはつまり『わたしの下着を見つけてくれてありがとう、でも皆の前では恥ずかしくて素直になれないからせめて紳士と呼ばせてほしい』といった隠しメッセージが込められてい……るわけがない。オレは阿呆か。否、変態紳士の間違いだ。

というわけで翌朝には学校に行きたくないから家に引きこもってゲームしたり漫画読んだりネットサーフィンしたりするんだ病（通称ニート、じゃないか。一応学生だし）にかかってしまったオレは、その日を境に不登校となりましたとさ。めでたしめでたし。

ちくしょう、一度でいいから彼女が欲しかったぜ……。

(3)

とはいえ、そう簡単には終わらないのが人生って奴だ。中学三年生の夏の時点で引きこもりになってしまったとしても、これはこれで引きこもりになる時期がよかったのではないかと今更ながらに思い返してしまいそうになる今日この頃だったりもする。

オレだって人並みに人生の墓場って奴をこの身を持って体験してみたいと思っているし、そうなるまでは絶対に死んでたまるもんかと息巻く予定だ。たとえそれが後に後悔しか生み出さないと断言されようがな。

中学校を卒業すれば、人は皆、高校生になる。そうなれば今まで同じ学校に通っていた奴らとは異なる、県外の高校に進学する道を選択することも可能だ。

まあなんだ、これは別に変態紳士と罵られることに耐えられなくなっただけで逃げるわけではなく、いわゆる高校生デビューというものを実践してみるのも面白いかもしれないな、と考えてみたただけなので勘違いしないように。

実際のところ、オレの両親は父さんも母さんも仕事の関係で一年のほとんどを海外で過ごしている。日本に帰ってくるのはお盆と正月、あとはゴールデンウィークに限られ、県外の高校を受験することに反対はしなかった。因みにオレには妹が一人いるのだが、兄で

あるオレを差し置いて、既に県外の有名進学校で寮生活をしているので、妹もまた顔を合わせる機会は春休みと夏休み、そして冬休みに限定されている。

兄弟の仲は良くない（妹が一方的にオレを嫌悪している）から、オレが実家を離れようが別段、問題はないだろう。そんなわけで引きこもりを始めてから数ヶ月、都内の高校に無事合格することができた。が、その過程において裏技っぽい手を駆使したことは家族以外に感づかれないように細心の注意を払うことにしよう。

というわけで三月下旬。卒業式でさえも出席を拒否して引きこもり生活を最後の最後まで満喫してみるという墮落の選択肢を選んできましたオレは、実家暮らしの人間であれば誰もが一度は憧れたことのある（かもしれない）、一人暮らしと言う名の自由を手に入れるために単身、上京するのだった。まあ、ぶっちゃけ今の今まで一人暮らしっぽい生活を送っていたわけだがな。しかしながら両親の思惑にまったく気づいていなかったオレは、それが一人暮らしをするためのアパートではなく、大学時代の知り合いの家に居候する形であったことを、つい今しがた理解することになる。

だってほら、よく見てみるよ。オレを出迎えてくれたのはアパートやマンションといった類ではなく、誰がどう見ても一軒家にしか見えないじゃないか。目を凝らしたら形が変わるわけでもあるまい。今この場所に辿り着くまで、オレはこれから三年の間お世話になるであろうアパートが実はアパートではありませんでした、という事実をまったく知らされていなかった。というか何一つとして聞かされていなかったわけか、オレは。両親の信頼度は限りなくゼロに近いつてことを無理矢理に実感させられたぞ。両親に一杯食わされたことに溜息を吐き、改めてオレは目の前に佇む一軒家を観察してみることにした。

二階建ての一軒家は、一階を店舗とした住居兼雑貨屋っぽい。いや、雑貨屋というよりは何でも屋の方がしっくりくるか。

硝子窓から店内の様子を確認してみたところ、種類問わず様々な

物が無造作に置かれている。『閉店してないね』と書かれた札のかけられたドアの前に立ち、商品によって築かれた山々の最奥に存在すると思われる、未だ姿の見えぬ店員に気づかれないようにゆつくりとドアノブを回して、中に入ってみた。ふと、視界に捉えた本棚の奥を見てみれば、埃をかぶった漫画本が巻数順に並べられている。以前はきつちりと陳列していたであろう形跡が見られたが、長い年月をかけて地層を生み出すかのように、値札の貼られていない商品が空いたスペースを侵略していったのか、今では見る影も無い。なんでしょう。いいのか悩む必要すら皆無、正にここは？ごみ屋敷？と称するに相応しかった。

「やあ、いらつしゃい。今日は何をお探しで？」

眉根を寄せたまま店内を見渡していると、何処からともなく声をかけられる。

声の主を捜そうにも商品が邪魔で何処にいるのか見当もつかない。天井には防犯カメラも設置されていないみたいだし、これじゃ万引きされ放題だぞ。

「商品が多すぎてどこにいるのか分からないんですけど」

商品が邪魔で、とはさすがに言わないことにした。仮にも売り物だからな。

するとオレの声に反応し、声の主がくつくと喉を鳴らす音が聞こえた。

「おおい、キミの耳は節穴かい？ 私のいる場所が分からないとは困ったものだね」

初対面の人間に、それもお店に入ってきたお客に対して随分な言い様だ。この家の住人はこんな無礼な奴を雇っているのかよ。ただのバイトかもしれないけど、どう考えても人選ミスとしかいえないぞ。

「くふふつ、……ほら、こっちだよこっち。キミのすぐ後ろにいるじゃないかい」

「うわっ」

ふー、と首筋に息を吹きかけられた。ぞぞぞつ、と不意打ちに肩を震わせる。

「いいいいきなり何しやがるっ」

「んー？ 鈍感なキミに一刻も早く私の存在に気づいて欲しくて背後から忍び寄りそつと息を吹きかけてあげただけだが、果たして今の一連の動作に何か問題でもあるのかな？」

「大有りだ！」

店内であることを忘れ、人目を気にせずに大声を上げてしまい、オレは慌てて口を閉じる。そんなオレの姿をじつくりと値踏みし、意地悪そうな笑みを浮かべながら店員が呟く。

「心配は無用さ、店の中にいるのは私とキミの二人だけだからね」

「そ、そっか……」

他のお客に迷惑をかけていないと知って安堵した。

「そつ、キミと私の二人きり。……興奮、する？」

可愛らしく小首をかしげ、訊ねてくる。

する、とは言えまい。というかいったい何なんだこの店員の態度は。人をおちよくつて楽しそうに口元を緩めるなんて性格が悪いにもほどがあるぞ。

「まあそんなに怒らずにこっちに来るといいさ。客商売は笑顔が一番だからねえ」

質問の答えを聞く前に、店員は店の奥へと隠れてしまふ。後を追うと、商品の山に埋もれたレジカウンターを発見した。椅子に座って栞の挟まった読みかけと思しき漫画を手取る店員に、半ば呆れながらオレは口を開くことにした。

「あのさ、この家の人に用事があるから呼んできて欲しいんだけど」「どんな用事があるんだい？」

くいつ、と左手の中指で眼鏡の位置を調整し、上目遣いにオレの顔を瞳に映し出す。

「……いや、だから用があるのはこの家の人であってキミではないんだけど」

「ふむう、キミは耳だけでなく目も節穴のようだね?」

どういう意味だ。何度も何度もオレの心を少しずつ抉り取るような言葉をぶつけてきやがって、性格だけじゃなくて口も悪い奴だな。この店員と出会った途端、精神的ダメージが限界値を振り切らんばかりに蓄積されていくぞ。

「いいさ、おバカさんなキミのために私が一から説明してあげようじゃないか」

漫画本を閉じて、ゆらりと立ち上がる。オレよりも身長が低いのか、視線は少しばかり下を向けることになった。

「店の名前は架織乃骨董屋^{かおりの}。家の表札は架織乃。そして私の名前は架織乃胡桃^{こうづ}。つまりは私がこの家の住人だってことさ。ちゃんと理解できたかな、おバカさん?」

「えっ、……キミが?」

俄かには信じられない、とは言えないか。家主ならなんとなく納得できないこともない。

仮に、彼女がただのバイトであった場合の方が大問題だ。……勿論、家主だろうがバイトだろうが態度がすこぶる悪いことに変わりはないんだけどさ。

「そうだとも、私が架織乃骨董屋の責任者ということになるわけさ。ところでキミはいつたいいつになったら私の質問に答えてくれるんだい?」

「質問? って、何か訊かれたっけ」

「キミは記憶力も乏しいのかい? キミと私のファースト・コンタクトにおいてキミが何を探しに架織乃骨董屋に足を踏み入れたのかについて訊ねたじゃないか」

ああ、そういえば確かにそんなことも言われたかもしれない。声の主が何処にいるのか捜していたから忘れていたよ。だがオレは別にお客として此処を訪ねたわけじゃないんだ。

「ええっと……、キミが家主ならさ、今日からオレが此処に住まわせてもらうことを両親から聞いていると思うんだが……何も聞いて

ないか？」

そう言つて、オレは彼女の姿を視界に捉える。

家主と呼ぶには随分と歳が若いように見えるのは気のせいではないはずだ。下手したらオレと同じ年なんじゃないだろうな。

真っ直ぐな黒髪を腰まで垂らした彼女は、口角を上げて意地悪そうに笑みを浮かべている。ほんの少し丸みを帯びた四角い眼鏡は、フレームの上半分が赤、下半分が黒に染まり、彼女の表情に奇抜さを加えているように感じた。身長はそれなりに高いほうで、すらっとした体型だ。つまり何が言いたいのかというと、胸はでかくない。勿論、小さいわけではないのだが、顔を埋めるほどの大きさではないってことだ。肉付きが悪いのかな、抱きしめても折れてしまいそうな印象が残る。自己紹介をされた時にピンときたが、胡桃って名前からして骨董品っぽく（ああそうだよダジャレだよ悪いか）、性格や口調は頗る悪いってことが分かったけど、もし、将来的に彼女と付き合うことになるとすれば、さながら骨董品であるかの如く大事に大事に接しなければ壊れてしまいそうな脆さを持ち合わせている。

「キミの疑問に対する返事をするべきなんだろうけど……、んー、なんだろうね、キミの視線が物凄く失礼に見えるわけだが、もし良ければ目を潰してもいいかい？」

「やめろ」

即、拒否する。潰されたら目の保養ができなくなるから勘弁してもらいたい。

「ははは、冗談だよ冗談。と言っておけば何を言っても許されるから便利な言葉だね」

どうでもいいからとつと話を進めてくれ。彼女と言葉を交わすだけで精神的な疲労がとんでもないことになりつつある。

「で、返事をする前にだ、まずはキミの名前を教えてもらえないかな？ そうしなければ私はキミが信頼に足る人物か否か理解することすら困難だからねえ」

片目を閉じ、右の掌を向けて促してくる。そういえばまだ自己紹介をしていなかったな。

コホンッ、と小さく喉を鳴らし、口を開く。

「オレの名前は釣枝比念。つりえだ ひねん 四月から虹ヶ丘高校にじがおかに通うために上京してきたんだ」

「ふんふん、キミが噂の釣枝比念か。まあ自己紹介されなくともキミの両親から今日の午後には我が家に着く予定だと連絡が来ていたから初めから分かっていたんだけどね」

連絡が来ていたことに一安心だ。しかし回りくどいな。第一印象が微妙になっただぞ。

「そういえばなんとなく覚えのあるような顔だねえ。でもやっぱり憶えてないから見覚えはないってことで一つよろしく頼むよ。因みに私の名前を呼ぶ時は胡桃でいいさ」

彼女、胡桃はレジカウターの引き出しを開けて写真らしきものを一枚取り出して、オレの顔と写真とを、交互に視線を向けて呟く。「なんだ、その写真にオレが写ってんのか？」

一步、胡桃に近づいて、写真を覗いてみる。写っているのは小さい男の子と女の子だ。

「これ、キミだろう？ 随分と前に釣枝家が我が家に遊びにきた時の写真だよ」

「……すまん、憶えてないな」

窮地に追い込まれた悪徳政治家ってわけではないが、まったく記憶に御座いません。

「ってことは、胡桃はオレとは初対面じゃないのか」

「そんな分かりきったことを訊ねられても困るさ」

恥ずかしそうに視線をそらし、頬を染め……ていない。そりゃそうだよな、誰がどう見ても演技なんだから。何が困るんだかお訊ねしたいものだ。

「見るかい」

写真を手渡される。片方はオレだ。昔の写真とはいえ、さすがに

自分自身の顔が分からないほど間抜けじゃない。んで、その隣でオレと手を握って満面に笑みを咲かせた女の子は誰なのか。……もしかして胡桃か。いやいや、もしかしなくても胡桃なのか。

「なあ、この女の子は——」

「妹さ」

「あ、……そっか」

少し残念に思ったのは隠しておこう。胡桃にバレたら冷やかされそうだからな。というか写真の中のオレは随分と胡桃の妹と仲が良さそうだな。昔の自分をぶん殴りたくなるぞ。

「胡桃にも妹がいるんだな」

「そっというキミにもいるじゃないか。ええっと、名前は確か……」

「どうせ会うこともないから憶えなくていいぞ」

少なくとも今の時点では出番がなさそうだから。なんてな。

「まあいいさ。とにかく今日は早々に店じまいしないといけないね」
高く積み上げられた商品を倒さないように、足元に気をつけながらオレの横を通り抜け、お店の入口へと軽やかに進みゆく。『閉店してないね』の札を引っくり返して『開店してないね』が表を向くようにすると、ドアの鍵を閉めた。

「さて、ほんの少しだがそこで待っていてくれたまえ、ちと部屋の中が散らかっていて恥ずかしいものでね、迅速に片付けてくるさ」

肩を竦める仕草を披露し、暖簾のれんに隠された未知なる領域——更にお店の奥へと姿を消してしまった。トントントン、と軽快に階段を上がる音が響く。結構短めのスカートを穿いていたからな、暖簾が無ければ後姿を拝みたくなるところだった。やがて足音が聞こえなくなると、一人取り残されたオレは手持ち無沙汰で、改めて店内を見渡してみる。

「骨董屋ねえ……」

このお店のいったい何処に骨董品が置いてあるというのかね。

商品の種類があまりにも多すぎて、何を専門に取り扱っているのかさえ不明だ。そもそもお客が来るのかどうかさえ甚だ疑問だ。

「いや、ちよつとまで、店内が荒れ放題なのに部屋の中を片付けてくる……？　これ以上に足の踏み場がないってことなのか……？」

店内がまるでごみ屋敷だというのに、部屋の中はそれ以上に散らかっているとも言うつもりか。架織乃家にオレが住める場所が存在するのか不安になってきたぞ。

【 1 - 2 】

「……ん？」

椅子に座り、胡桃が姿を現すのを店内で待っていると、お店の入口付近でガタガタと音が聞こえてきた。こんなお店（酷い呼び様だが、他にはごみ屋敷としか言い様が無い）にお客が来るとは驚きだ。何を求めて足を運んだのか興味が沸く。だが残念なことに、つい先ほど胡桃がドアの鍵を掛けて閉店しやがったから店内を見て回ることは不可能だ。

「しかし粘るな……」

椅子から腰を浮かせ、恐る恐る入口へと近づいてみる。

お店のドアには『開店してないね』の札がかかっているわけだし、暫くすればお店が閉まっていることに気づいて諦めるだろうと考えていたが、一向に帰る気配がない。それどころか、ドアをノックしながらも店内を確認しようと硝子窓からひょっこりと顔を覗かせているじゃないか。そんなに欲しいものがごみ屋敷にあるのか。どれだよ、教えてくれ。

「お、わっ」

胡桃は二階から下りてくる気配はないし、どうすりゃいいんだと眉根を寄せていると、硝子窓越しに目が合った。どうやら女の子のようだが、オレや胡桃と同じくらいか、それかもう少し幼く見える。てつきりじいさんはあさんが客層の大半を占めると考えていたんだが、架織乃骨董屋がますます理解できなくなってきた。と、その瞬間、女の子はまるで時が止まったかのように動かなくなる。やべえ、居留守使っているとも思われたか。

「おい、胡桃。お客が来てるぞー」

「まーただよー」

かくれんぼか。

いつまでたっても胡桃は下りてこない。視線をお店の入口へと戻

してみると、女の子はオレの顔を見つめたまま固まっている。どうすりゃいいんだよ、おい。

「……ったく、仕方ねえな」

女の子の様子を見るに、これは直に会って閉店していますと言わなければ納得しないだろう。下宿先に着いて早々なんで店員の真似事をしなくちゃならないんだかな。

商品を倒さないように入口へと移動し、鍵を開けてドアの外に出る。お店の前にいたのは、学生服に身を包んだ可愛らしい女の子だった。

「あー、すみません。今日はもう閉店しちゃってるみたいで……、いやあの、オレは別に店員ってわけじゃないんですけど、なんていうかその、お店の人が勝手に閉めちゃったんで……って、聞いてます?」

「……ね、ん」

ぽつりと呟く。

オレの顔を瞳に映しこみ、ぶるぶると震えている。なんだなんだ、オレの顔は見るに耐えないってか。Hさんから変態紳士と呼ばれたオレでもさすがにこりや傷つくぞ。

が、女の子は予想外の行動に出る。

「うわえおあつ」

あるうことか、お店の前で堂々と抱きついてきやがった。

何打コレは、いやなんだこれは、いきなりフラグが発生しましたっけか。

「比喩!」

ぎゅうつと、あらん限りの力を振り絞って抱きしめる女の子は、オレの名前を呼んだ。

「ちよつ、あの、えええつ?」

意味が分からないよ、これ。誰か助けて——いやごめんやっぱ助けなくていいや。

とてもいい匂いがオレの鼻孔をくすぐる。別に香水をつけている

わけでもないのに、なんでこんなに脳を刺激するような匂いがするんだ。これが女の子特有の匂いつて奴か。それだけでなく、これでもかと言わんばかりに膨らんだ胸の感触が思考を停止する。抱きついたらままオレの顔を見上げる女の子は、嬉しそうに口元を緩め、「会いたかった」と呟いた。変態紳士にも遂にモテ期到来か。

「おや、お帰り。今日は早かったんだねえ」

軽めのトリップを満喫していると、いつの間にやら胡桃が店の入口に立っていた。

「こ、胡桃！ この子……知り合いか？」

「くくつ、知り合いもなにも愛すべき私の妹だが？」

「いつ、妹だと？」

そつえばさつき見せてもらった写真にオレと一緒に写っていたのは妹だったな。仲睦まじく手を握っていたっけ。なんだか更に恥ずかしくなってきた。

意地悪そうに微笑する胡桃から、その妹へと視線を戻してみる。

オレの反応を見た胡桃の妹は、何故か眉根を寄せた。

「比念……？」

胡桃とは異なり、妹の方はオレの顔を憶えているらしい。

だが残念かな、オレは彼女の名前はおろか、顔すら憶えていない。写真に写る姿から推理するに、幼い頃は懷かっていたんだろうなとは思っていたが、まさか現在進行形でいきなり抱きついてくるほどの間柄だったとはな、想定外だ。

「こんばんは、えつと……」

次に行く言葉が出てこない。だってオレは胡桃の妹の名前を知らないんだから、なんて呼べばいいのか分からないからな。どうすりゃいいんだ。

「名前、憶えてないの？」

と、そんなオレに向けられたのは、疑念の込められた一言だ。

「あつ、……ごめん」

相手は憶えていて、こっちは憶えていない。逆の立場になれば分

かと思うが、相手に対して申し訳ないという気持ちが罪悪感へと変貌しそうだ。

「じゃあ、約束も？」

「約束？ あー、うーん……」

目が泳ぐ。オレはこの子と何か約束を交わしていたのか。

小さな脳みそ以外何も入っていない頭をフル回転して記憶の引き出しを探ってみるが、それは無駄な足掻きのようだ。まったく思い出せない。

オレの様子を見て、胡桃の妹は明らかに落胆していた。

「訓夏^{くんか}……わたしの名前は、架織乃訓夏です」

哀しそうに瞳を潤ませて、胡桃の妹——訓夏はオレから一步距離を取る。柔らかな感触が遠ざかってしまったことに心残りが生まれてきた。彼女の名前さえ憶えていれば抱きしめ返すこともできたかもしれないというのに、オレはなんて勿体無いことをしてしまったんだ。自らの手でフラグを一つへし折っちまった。

「く、訓夏ちゃんか」

慌てて名前を呼んでみるが時既に遅し、気づけば一定の距離を保たれているじゃないか。

「どうだね、可愛い妹だろう？ この世で私よりも可愛らしい生き物が存在するというのであれば、それは間違いなく、くんかたん以外にはありえないさ。……キミ、惚れる？」

「お姉ちゃん、うるさい」

オレから距離を取る訓夏とは対照的に、胡桃はオレの肩に手を置いて耳元でぼそぼそと囁く。とはいえ最後の一言しか声のトーンは小さくなかったので訓夏には丸聞こえだ。案の定、怒られてやがる。そして何故喜ぶ、胡桃。

「へえ、くんかたんって呼ばれてるんだ？」

「忘れん坊には何も教えるつもりはありませんね」

うわ、態度が一転、冷たくなったぞ。フラグへし折ったらバッドエンド直行かよ、おい。

「そ、そっか」

「……ですが、どうしても比念が知りたいのなら、教えてあげないこともありませんが、そもそも比念はわたしのことをくんかたんなどとは一度も呼んだことがありませんから特に知る必要はないと思いますけど、でもそれを言うなら比念が何も憶えていないことの方が問題であり原因に当たるわけですから自覚するべきだと思います」

「え、あー、……うん？」

「ごめん、何を言いたいのがよく分からなかった。オレが、何を、自覚すればいいんだ。」

すぐ横から、胡桃の苦笑する声が聞こえてくる。横目に確認してみれば今にも吹き出しそうになった胡桃の姿があった。こいつはこいつで何がおかしいんだよ。

「というわけでだね、今此処に我が？ごみ屋敷？の住人が勢ぞろいしたわけだよ」

さつきから？何が？を連発している気がするが、だから何がというわけなんだよ。

「ってか、今こいつ自分の家をごみ屋敷って言いやがったぞ。オレは自分が何を自覚しなくちゃなんのか分かつちやいないが、胡桃本人はどうやら架織乃骨董屋がごみ屋敷さながらな現状を把握し、現実から目をそらしてはいないようだ。が、直視しておいてこの調子なわけだから、なお悪いような気がする。せめて掃除してくれ。」

「此処は両親が開いたお店なのだがねえ、見ての通り、架織乃骨董屋の店内はごみ屋敷と化しているさ。近隣住民にもその名で通っているよ」

「一度見れば誰でも納得しちまうわな」

ごみ屋敷とはいっても匂いがきつかったりカラスが集ったりごみを放置したりするわけじゃないだけまだ良心的といえよう。自分の敷地内にしか被害を出していないからな。

「さあて、堅苦しい挨拶は抜きにしようじゃないか」

「ん？」

胡桃はオレのそばを離れて訓夏の横に並び立つ。

悪戯っぽい笑みを浮かべ、ゆっくりと深呼吸をしてみせる。胡桃の性格を理解しつつあるオレは、声に出して指摘するつもりはないが、如何にも大根役者的な演技をしていますよって空気をもし出す。間を置いて、チラツとオレの様子を確認しているのがあからさますぎて笑えない。きっと、指摘すれば嬉々として反応するんだろうな。勿論、面倒だから黙秘だが。

「釣枝比念、ごみ屋敷へようこそ！」

そう言つて、胡桃は右手を差し出して来る。握手か。

「おう、ありがとよ」

罍を仕掛けられているわけでもないのに、オレは素直に胡桃との握手に応じる。その手はとても温かい。そして柔らかかった。……いや、別に興奮はしていない。

次に、視線を訓夏へと移してみる。しかしながら訓夏は、何故だか頬を膨らませたままそつぽを向いていた。

「えーっと、訓夏ちゃん？ 握手は……」

「しません、比念なんか嫌いですから」

ぐはっ、面と向かつて……ではなくそつぽを向いたままだが、女の子から嫌いだなんて言われるのはこれが初めてだ。こいつは精神的ダメージがとんでもないことになるぞ。限界値をあつという間に振り切りやがる。なんかこう胸の辺りがぐぎゃああんって擬音を発しながら締め付けてくるようだ。意味不明とか言つなよ。でもそれだと肉体的にもダメージがあるってことになるな。これから先しっかりとやっていけるのか一抹の不安ががが。

「ちゃん付けは、子供っぽいので拒否なんです」

「あ、そういうことね」

嫌われていないっぽいのでホッとした。……いやいや、違つだろ阿呆が。わざわざオレの名前を呼んだ上で嫌い宣言されたわけだから安堵している場合じゃねえぞ。

「……それじゃあ、訓夏？」

胡桃と同じように、訓夏の名前も呼び捨てにしてみた。すると効果覷面って奴かどうかは分からないが、訓夏は正面を向いてオレと目を合わせる。それから、おずおずといった様子で右手を差し出した。

「……握手、します」

少々強引に、訓夏はオレの手を握る。

いきなり抱きついてきて微笑んだかと思えば、一転して距離を取り、可愛らしい瞳を潤ませてみせる。そして最後には、握手を交わすためにオレの手を握ってくれた。

「胡桃、訓夏。これから暫くの間、お世話になるよ」

「うむ、扱き使うから楽しみにしておいてくれよ、キミ」

まあ、とりあえずは、というわけで今日から架織乃家と言う名のごみ屋敷での新しい生活が始まるわけだ。そう考えると今にも心が弾んでくる気が……やっぱりしないか。

不安だ……。

【幕間（くんかたん劇場？）】

「部屋の片付けもほんの少しばかりではあるが済んだからね、ほらこんなところで立ち話もなんだ、二階に上がるといい」

「おお、そんなじゃあお言葉に甘えることにするか」

店内に戻ってドアの鍵を閉め直した後、お姉ちゃんと比念は暖簾をくぐって階段を上っていく。そしてその後を、わたしは無言のままついていく。

あつという間に階段を上りきり、比念は居間に案内された。

「麦茶を持ってくるから、キミとくんかたんは二人仲良くソファーにでも座ってのんびりまったりイチャイチャしながら待っているといいさ」

と言に残し、お姉ちゃんは台所へと足を向ける。とはいえカーテンを引いてしまえば台所からわたしと比念の姿は丸見えだ。たとえ面白いことを期待されていようと、わたしはその期待に応えるつもりはない。だって、バレたくないから……。

きたです北ですキタです着たです喜多ですキタデス！……遂に
来たです！

比念がうちにやって来たです！ くふううつうつ！

神様よくやりました！ ずっとずっとずっと祈って信じて良い子にして待っていた甲斐があつたてもんです！ ありがとうございますです！ いったいどれだけこの時が訪れるのを待っていたことでしょうか！ 今この瞬間に辿り着けた自分を褒めてあげたいです！ いやいや当然のように褒めちぎってやるです！ 自分ッ、よく耐え抜いたですっ、比念がいない間ずうっと我慢し続けていた自分をべた褒めしてあげなきゃこの想いは爆発するに違いないですよ！

うちに同居するって話を聞いた時から毎日毎日胸がドキドキしつ放しで破裂しちゃうようになってましたけどこれでようやく一安心できそう…… なわけないじゃないですか！ むしろ比念がそばにいるっただけで心肺停止状態に陥りそうで今からむちゃくちゃ不安と期待で胸が満員電車並みに窮屈になってるですよ！

それよりはは早く座ってください、比念が座るまでわたしが座れないんですからね！

ソファア？ それとも座布団？ んなもんソファア一択に決まってるです！

ソファアに座ればわたしと密着することができんですから考える意味もないし時間も勿体無いですよね？ ああもうっ、さっきはお姉ちゃんの言いなりになるつもりはないとかやせ我慢してみせただけど無理です！ やっぱ無理なんですっ！

比念がそばにいてるだけで倒れそうだからソファアに座らなくちゃ死んじゃうです！

だからほら早く座れてっんです！ 優柔不断な態度がマイナスになるのが比念には分らないですかっ？

『さて、どっちだ？』

……は？ 殺しますよ？ いやいきなり意味不明なこと言い出さないで下さいよ、そうしないと比念の寿命が縮む可能性がなきにしもあらずですからね、わたしの手によって！

どっちとか言われなくてもソファアに決まってますよね？

……え、……あ？ ……いや、いやいや、なんで？ ねえなんで？ なななんなんで比念はソファアじゃなくて座布団に座ってんですっ？ わたしと密着するのが嫌だからですか？ ももも勿論そんなわけないですよ？ 単に恥ずかしいだけですよね？ 分かってます、分かってますからそんなに恥ずかしがらなくても大丈夫ですよ。比念。座布団を選択された以上、仕方ないけどわたしも諦めます。ソファアに二人仲良く座るのは、ね。

だから我慢して座布団に座ってあげますよ、比念の隣でね！ そ

うつと、さり気なく、感づかれないように座ってあげるんです！
わたしのことを思い出してくれるまでは笑顔なんて見せてあげない
んですから早く気づいてください。わたしだってものすごく辛いん
ですから！ でもまあ座布団っていうのも案外いいかもしれないで
すね、座布団を置く位置によってはソファーに座るよりも密着する
ことが可能ですし、ひよっとしたら比念は予めこうなることを予期
していたですか？ ううつ、やはり比念は何を考えているのか分か
らないですね、表面は紳士っぽい態度で繕っていますけど、わたし
には既に裏の顔を見抜かれていることをお忘れなく！ 既にあの時、
比念の変態性について理解しているんですからね！ ええそうです
とも、紳士とは名ばかりの変態野郎ですよ！

変態ッ！ 変態ッ！ この変態ッ！

でも好きッ！ わたしも変態になる！ なります！ なってやり
ます！ 比念と一緒になら変態になって変態的な人生を謳歌してみせ
ますとも！

うぬぬうつ、はう、嬉しすぎて息ができません。比念の隣に
座る前に窒息死したら笑えませんかから息を整えなきゃですつ、とり
あえず深呼吸！ 新しい空気を肺の中に、そして比念の匂いをわた
しの体の一部につ！

スーハー、スーハー、スー……ゴフツ、ごほつ、ごふうつ、かは
つ、うつ！ がっ！

ぐつ、微妙に二人きりな空間に緊張しすぎて空気を吸いすぎ、た、
です……。比念が心配そうにこつちを見ているのがなんともいえま
せんね。しかも『訓夏、大丈夫か？』って声をかけてくれるなんて
優しすぎて恥ずかしいじゃないですか比念ッ！

『なんでこつちを見るんですか、バカですか。余計なお世話ですよ』
そしてわたしはもつとバカですか。なんで言いたいことは言えな
いのに酷いことは言えるんですか。それもこれも比念が何にも憶
えていないのが原因に違いありません！

言っておきますがこれは責任転嫁じゃないです、比念がわたしの

ことを憶えていてくれれば問題なかったけすし、比念はもつと頭の中をかき混ぜて思い出してみればいいですよ。そうすればきつとわたしと再会できたことに頬を緩ませるはずですから！ まったくもう、間抜けなところと朴念仁なところはあの頃とまったく変わらませんね。

……ん、まあ、でも、でも、やっぱりですが、相変わらずかっこいい……です。他の人から見れば普通かそれ以下かもしれないませんが、というかむしろそういう風に見えてもらわないとライバルが増えて困ります。もし比念を狙う奴がわたしの前に現れたら、バレないように殺る。ええ、そうです、殺つてやるです！ 主観的に見れば勿論のこと、客観的に見てもかっこよくしか見えないわたしの目は、比念のせいで節穴にされましたか？ 比念色に瞳の色を染められちゃったですか？ 残念？ いいえ、だがそれがいいです！ 比念以外の異性なんかどうでもいいですし興味ないから比念さえ見えていれば万事オーケーですよ！ とにかくわたしから見れば比念は特別で特大級にかっこよく見えるわけですから何も問題はないです！ 全てはわたしと比念を中心に回ればいいです、ていうか回れっ。

そういえば比念に抱きついた時に、ものすごくいい匂いがわたしの脳を刺激してきやがったですね。……うむう、やはり比念の匂いは反則です、犯罪です、むしろ比念は犯罪者です！ わたしの鼻はちよつとだけ特殊だから比念の匂いに目眩がするだけで済みましてけど、あの匂いを嗅がされたら一般人は一発ノックダウンされちゃうから警察を呼ばれて危うく逮捕されるところだったですよ！

でもなんで？ なんで比念はわたしのことを憶えていないのですか？ わたしの名前を忘れちゃうなんてただの忘れん坊どころじゃないですよ、ぶつ殺しますよ？

一体全体何の冗談かと思って危うく抱きしめたままついうっかり殺したくなっちゃったじゃないですか。ひょつとして比念はわたしに会えない日が続いて遂に頭がおかしくなっちゃったのですか？ それともわたしの顔を見た瞬間に嬉しすぎて脳が一時的に障害を起こ

したとか？ …… うん、どれもありえそうで怖いですね。ていうか比念が鈍感なせいで面と向かって嫌いつて言っちゃったじゃないですかっ！ どうやら本当の愚か者は自分自身だったってわけですね、分かります。思ってもいないことを何故口にしてしまうのですかね、そこら辺の事情について比念はもっとよくわたしを観察してみることをお勧めしますよ。そうですね、たとえばわたしの体の隅々まで知らないところがなくなるまで！ そうです、あんなところまでも比念は触るんです、そしてわたしはただじっと体を震わせて我慢して、でも我慢できなくて比念と！ でもどうせ比念は気づかないですよね、表情を見ればすぐに理解できますから。はあ。駄目だこいつ、早くなんとかしなければですよ。既にわたしがなんとかされているですが。

とにかく悔しいです。絶対に思い出させてやりますから覚悟しておくですよ、比念ッ！

【2・1】

「……えと」

架織乃家の居間に案内されたオレは、さてこれからどうすればいいのかと思案する素振りを見せてみる。居間には、薄型テレビと向かい合うようにコタツを挟み、二人掛け用のソファアが置かれていた。真ん中に穴の空いた座布団がカーペットの上に二つほど並んでいるが、さてオレに突きつけられた選択肢はどちらが正しいか。

一、胡桃に言われたとおり、二人仲良くソファアに座ってイチヤイチヤしてみる。

二、んなことすれば訓夏に十中八九罵倒されるからチキン野郎よろしく座布団だ。

「さて、どっちだ？」

「……何がですか？」

うげっ、本人に聞かれてるじゃねえかバカ野郎。つかテレビでけえな、何インチあるんだよこれ。テレビから三メートルは離れて見やがって下さいって言われるぞ。いやまてよ、ということは距離感的にソファアに座るのが正解ってことになるのか……とかなんとか考えている場合じゃないよな。

「いや、独り言だよ独り言、ははは」

「気持ち悪いって言ってもいいですか？」

「言ってもいいですかじゃなくて既に言ってるよねっ」

嫌いだと言われ、更には気持ち悪いとまで言われてしまった。…

泣いてもいいかな。

「どうでもいいですけど、早く座って下さい」

「うっ、そうだな」

とつとと座れこの優柔不断野郎とでも罵られているかのような気分だぜ。こんな状態でソファアに座れるほどオレの心は強くできていない。たぶん、硝子っぱいね。

というわけでオレが座ったのは座布団でした。チキン野郎で悪かったな、胡桃。

「……では、わたしも」

小声で囁くように言葉を紡ぎ、訓夏は深呼吸をする。

「——……ごふっ、かはっ……くっ……っ」

と、何故か咳き込んでいる。っていうかどうして深呼吸を始めたのか意味不明だぞ。

「訓夏、大丈夫か？」

苦しそくに口元を押さえ、訓夏は喉を鳴らした。まさか重い病氣にかかっているなんてことはないだろうな。変態と罵られるだけならともかく、そんなバッドエンドは御免だぞ。

「なんでこっちを見るんですか、バカですか。余計なお世話ですよ」
目を細め、オレの顔を睨みつける。心配したのにこの仕打ち、オレはマゾじゃねえ。

「そ、そっか」

心配する必要がないなら、まあそれはそれでいい。健康な方がいいからな。

ようやく落ち着いてきたのか、訓夏はオレに隠すことなく溜息を吐いてみせる。それから小さく頷いて、何事かを自分に言い聞かせるかのように座布団を手に取った。

「えっ、あの……訓夏？」

驚愕すべきは、その後の不可解な行動だ。

訓夏は、座布団をわざわざオレのすぐ隣に並べ直して、ソファに座るのと同じぐらいの距離感で体操座りする。ドウィウコト、ねえこれどういうこと？　もしかして期待してもいいってことなのか。いやいや何をだよ。オレは変態か。

「……なんですか、麦茶が来るまで黙る甲斐性もないんですか」

「すみませんっ、黙りますっ」

どんなキーワードが訓夏の逆鱗に触れるか分からない現状において話し掛けるのは災いの元になりそうだ。せっかく可愛い子がすぐ

隣に座っているというのに黙っていることしかできないなんて情けない、というよりは勿体無い。おあずけ状態の犬になった気分だよ。一方、麦茶はまだ来ない。訓夏と二人きりによる気まずい空気が居間に流れつつあるわけだが、胡桃はいい加減に台所から姿を見せたらどうなんだ。出待ちしてんじやねえだろうな。オレが我慢できなくなつて訓夏に手を出したところに、シニカルな笑みを口元に張りつけたまま「さあ、そろそろキミを殺そうかねえ」とか言いながら包丁を持ってきそうな性格をしている奴だからな。突飛な言動には行動もついてくる。慎重になれ、自分。

とりあえず、話題を見つける。数秒前に黙れと言われたことは都合よく記憶の中から消去することにしよう。手を出すのは我慢する（というよりもそんなことは絶対にしない。何故ならばオレはチキン野郎だからなっ）が、口を出すのは我慢できない。これから暫くは一つ屋根の下で暮らすことになるんだから、今のうちに訓夏と打ち明けていなければ後々の生活に影響が出そうな気がしないでもない。んじやあ、まずは天気の話でも振ってみるか。……うん、晴れですがそれが何か？ で終わるな。ついでに「黙ることもできない屑野郎なんですか」とか追撃されそうだな。もう少し話を膨らませることが出来る話題はないものか、たとえば……、ああ、これでもいいか。

「訓夏、今つて春休みだよな？　もしかして部活にでも入ってるのか」

すると、訓夏はオレの言葉に肩を揺らした。反応はしてくれないみたいだ。

トレーディング・カード・ゲーム
「……TCG研究会に、入っています」

「TCG研究会？　ひょつとして、カードゲームが好きなのか」
「こくん、と頷く訓夏。……おお、素直な姿を見ると思わずぎゅつと抱きしめたい衝動に駆られるな。だが今は耐えろ、胡桃がどこにいるのか分からない。……いや、台所か。」

「へえ、奇遇だな、オレもTCGは好きなんだよ。訓夏はどのTC

Gで遊んでるんだ？」

焦らずにじっくりと時間をかけるように話題を作り、オレは訓夏の表情を確認してみた。

少しばかり赤みがかった黒髪は、姉の胡桃とはまったく異なる印象を与えてくれる。グラデーションボブって言うのかな、なんか後ろ髪が短くて、前下がりに髪の水が長くなっているのが印象的だ。

俯けば前髪で表情が隠れ、顔を上げれば元通りになる。その髪型がとてもよく似合っていて、存在感を一際際立たせているようだ。無論、容姿端麗なのは一目瞭然で、姉と二人並んで外を歩くだけで注目の的になることは間違いないだろう。ぱっちりとした瞳を長い睫が化粧するかのようには整わせ、目元に力強さも加えている。

日焼けしないのかそれとも肌を露出しないように気をつけているのか、訓夏の肌は不健康な印象を与えかねないほどに真っ白に澄んでいた。そのせいか、それほど運動が得意なようには見えない。ほんの少し走っただけで息が上がってしまい、頬に赤みが差す姿が容易に想像できる。

身長は百四十五から百五十センチぐらいで、年相応と言ったところだろう。胸の膨らみ具合は服の上からでもはっきりと認識できる……でかい、とてつもなく。姉の胡桃が悔しそうに下唇を噛んでいる姿が脳裏に浮かんでくるほどに、めちゃくちゃ大きい。抱きつかれた時にあの胸の感触を味わったが、あれは悪魔の実だ。理性を破壊する殺人兵器だ。

そういえば、まだオレは二人が何歳なのかすら知らないんだよね。幼さが残る顔立ちの訓夏はオレよりも年下だと思っが、胡桃は想像がつかない。話の種に聞いてみるか。

「……奇遇じゃ、ありません」

「え？」

妄想に身を焦がしていると、訓夏が眉を潜める。

なんだ、オレの視線が厭らしすぎて視姦と間違われたか。せめて目の保養と言ってくれないかな、男には必要不可欠な行動だからさ。

はあ、と溜息を吐いた訓夏は、諦めたように言葉を続ける。

その際、学生鞆の中からデッキケースを一つ取り出した。

「?トキの迷宮?ですよ」

T C Gの名前を聞いて、オレは「ああ、」と頷いた。

「懐かしいな、子供の頃に遊んでたよ。昔はずっとカードゲームばかりしてたっけ……」

「……もう一つデッキがありますから、やってみますか?」

思わぬお誘いに身を乗り出しそうになったが、どうにか堪えてみせる。

「あー、いや、遊んでたのは何年も前のことだし、ルールを忘れちゃったからさ」

「そう、ですか。……残念です」

学生鞆からもう一つデッキケースを手にとって、コタツの上に置く寸前で手が止まってしまった。ううむ、悪いことしちゃったかな。でもだからといって遊んでみるわけにもいかないし、苦渋の選択だよな。

「ああ、ところでさ、訓夏は何歳なんだ?」

このままじゃ気まずいので、話題を変えることにしよう。だが、つまらなそうにデッキケースを仕舞いこむ訓夏は、オレと視線を合わせることなく呟く。

「十四歳ですよ。虹ヶ丘中学校の三年生になります」

ということはオレより一つ年下ってことか。

「……比念は虹ヶ丘高校ですよね、四月からわたしと一緒に登校できますよ」

虹ヶ丘は中高一貫校だ。実際にはまだこの目で見たことがないからどんなもんか分からないが、同じ敷地内に校舎が建てられているらしい。多少の不安もあったわけだが、訓夏が虹ヶ丘中学校の生徒でよかった。知り合いが一人でもいると胸が軽くなる。

「おう、そういうことになるな。朝寝坊しないように毎日起こしてくれると助かるよ」

冗談混じりに笑いながら言ってみる。が、

「比喩が、そう言うなら……」

ぼそりと、訓夏は視線を合わせないまま返事をする。

……うん、空耳かな。でなければ今この瞬間、オレは毎朝（胡桃の）妹が起こしに来てくれるフラグを地力で勝ち取ったことになるぞ。よくやった、オレ！

「くくつ、残念ながらくんかたんは私のものだ。キミには渡さんよ、釣枝」

話が盛り上がっているのか否か不明だが、ようやっと胡桃が姿を現した。御盆にコップを三つ、麦茶を持ってきてくれた。こいつ出待ちしてやがったな。

「さあ、私が丹精込めて注いだ麦茶を飲んで疲れを癒すといいさ」

コタツにコップを置いて、胡桃はソファーに腰掛ける。隣には訓夏、そして背後には胡桃がいる。モテ期ゲージが振り切れてないよな、これ。

「戴くよ」

コップを掴み、麦茶を一口。此处に来るまでに随分と道に迷ったからな、喉を潤すことができて一息つけた。

「……飲んだね？ 私が注いだ麦茶を飲んだね、釣枝？」

にへらつ、と表情を緩めたのは胡桃だ。

「飲んだけど、それがどうした？ 意味深な台詞でオレを驚かせるのが目的か？」

「ははは、またまたご冗談を。驚かせるのはついでに決まっているだろう？」

ついでかよ。それとは別に何か目的があるみたいだが、いったい何を企んでいるのやら。

「風の噂という名の私の両親から聞いた話によるとだがね、キミは超常現象的な能力を扱えるらしいじゃないか？」

胡桃の台詞に、オレはコップをコタツに置いた。

「……それは漫画の話か？」

「だとすればキミに質問することは何もないんだがね、嬉しいことに現実の話だよ」

釣枝、この話題に関してはキミが一番理解しているはずだろう、と付け加えて、胡桃は美味しそうに麦茶を飲んだ。

「どうやらこいつに隠し事はできそうにないな。まったくもって食えない性格をしていやがる。誰に似たんだかな。……ああ、そりや胡桃の両親に決まってるか。」

「誰から聞いたって？」

「風の噂という名の私の両親だが？」

「直訳するとお前の両親ってことか」

胡桃の両親が知っているということはだ、つまりオレの両親が秘密を喋りやがったってことになるわけだ。家族以外に知られるのは面倒だからとあれほど口を酸っぱくして言い聞かせたのにこのざまか、がっかりだよ。此処に住まわせてもらう代わりにネタを提供したとか言われたらグレちまいそうだ。

「それで？ キミはどんなことができるんだい？ さあ、ほら、早く教えたまえよ」

「……サイコメトリーって知ってるか」

これ以上粘っても無駄だ。いずれは言わなきゃならないだろうからな。

胡桃の口撃に観念し、オレは自分の秘密を暴露する。

「ふむ、聞いたことがあるね。とある漫画の主人公がそんな能力を持っていたかな？」

胡桃と訓夏に向き合い、オレは左手の袖を捲くってみせる。左腕には、色や大きさの異なるカラフルな数珠を嵌めていた。

「釣枝、キミにとって最近の流行は数珠ってことを私たちに言いたいのかい？」

「違う、そうじゃない。この数珠がなければオレは頭がおかしくなっちゃうんだよ」

「既におかしい……いや、失敬。……で、何がどうして数珠を嵌め

「ているって？」

今、さらっと酷いこと言いやがったよな、オレの耳は節穴じゃねえぞこんちきしょう。

「サイコメトリーって言ったけど、正確には？接触反応？って能力なんだ。対象となる物体に左手で触れるだけで、その物体に関するデータが映像として脳裏に浮かび上がってくるわけだ。……人間や動物のように命ある生き物には行使することができないんだが、無生物であればどんな物でもオレは能力を行使することが可能だ」

右手で数珠を触りながら、更に説明を続けていく。

「んで、オレが未熟なのが原因かもしれないけど、この能力を行使するのを抑えることができないんだ。我慢ができないってわけじゃない。左手で触れると、まるでそれが自然の摂理であるかのようにオレは接触反応によって視ちまうんだ……」

ある意味、この能力は呪いのようなものだ。こんな能力があるから、オレは人と接するのが苦手になっちまったんだからな。……いや、苦手になったというよりは意図的に避けていたという方が正しいか。

「……では、今もその左手で何かに触れれば、視えてしまうのかい？」

胡桃の問いに、オレは首を横に振ってみせる。今はもう、心配することはない。

「いや、それがそうでもないんだ。何故かっていうと、これを嵌めているおかげだな」

左腕に嵌めたカラフルな数珠がよく見えるように、二人の顔に近づける。

一見、何の変哲もない数珠に見えるが、実はこれ、凄い効力を持っているんだよな。

「何でもかんでも視えちまうせいで気づけばノイローゼ寸前にまで陥ったオレを見かねた両親がな、どっかの神社でお坊さんに頼んで作ってもらったんだよ。その時のオレはまだ五歳ぐらいだったの

によ、視えないようにするには左腕にこの数珠を嵌めろって言われてな、まあ初めは半信半疑だったけど、嵌めてみると、途端に何も視えなくなつて大喜びだ。これでようやく普通の生活が送れるってな？」

二人の前から腕を引き、肩を竦めてみせた。まるで冗談のような話をしているのだから、おどけてみせたくもなる。全てが事実なんだけどもな。

「ふむう、……ということは釣枝、キミはひよつとして、既にサイコメトリーなどできない人間になつてしまつたのかい？」

否定する。それは解釈の違いだ。

「言つたろ？ 数珠を嵌めていなけりや、オレは頭がおかしくなりそうだってさ」

「いやだからキミの頭がおかしいのは言われなくとも知つているのだが？」

「泣くぞこら」

「どうぞご自由に、キミが泣く姿などぞくぞくしそうだねえ」

真面目な話をしているつてのに、ほんの少し気を抜いただけで話が脱線する。オレの隣に座る訓夏は一言も喋らずに黙つて話を聞いてくれてるつてのによ。マジで泣きたくなる。

「とにかく、今まで説明したことをまとめれば理解できると思つがよ、オレの能力は、この数珠を嵌めている時は抑えることが可能……というか完璧に視えなくなつちまつて、逆に数珠を腕から外せば、触れたものを接触反応で視ることが可能つてわけだ」

「なるほどなるほど、つまりその数珠はキミの能力を一時的に封印しているわけだね？」

「そういうことになるな」

ようやく話が繋がった。冗談でもオレの頭がおかしいだなんて言われたくないつての。

「……ああ、因みにもう二つほど聞きたいのだがね、数珠を外した時のキミは、今でも無差別にサイコメトリーをしてしまうのかい？」

あと、視えるものの有効範囲……つまり時を遡って過去を視ることはどの程度可能なかねえ？」

何かを思い出したかのように、胡桃は質問を追加する。

「いや、それはないぞ。長いこと数珠を嵌めていたのが原因か分らないけどよ、数珠を外してる時に接触反応するには精神を集中する必要があるんだ。それと二つ目の質問についてだが、やろうと思えば一年前でも十年前でも視ることができな。まあ、当然のことながら過去に遡れば遡るほど時間も掛かるし、精神的な負担も大きいがな」

「……ふむ、では特定の場所において特定の記憶を映像として映し出そうとするには、果たして如何程の時間を必要とするのかな？」

「なんか随分と限定的な質問だな？ ……えっと、視たい記憶が初めから決まってるって、その記憶が過去に残っているとすれば、ものの数秒で視ることができるぞ」

「よし、分かった。キミは今日から死ね」

「えっ」

「それが嫌なら死ね。——じゃなくて高校卒業までの三年間、私と共に湯船に浸かり同じ部屋で寝るがいい。さあ、どっちがいいか選択したまえ」

いきなり何を言い出すんだ、こいつは。

オレと会話してる最中に頭の螺子が取れちゃったんじゃないだろうな。

「おい、胡桃。いきなりどうしたんだよ」

「おやおや、説明を所望すると？」

当然だ。説明を省かれても意味が分からない。

出会ってまだ一時間も経たない相手から？死ね？と言われるなんて、想定範囲外に決まってるだろうが。オレはまだ人生を謳歌してないからな、死ぬなんてとんでもない。いつかオレのことを理解してくれる女性と出会えるまで死んでたまるかってんだ。だとすれば後者を選択することになるわけだが……おっと、誰か来たようだ。

ゲフンゲフンツ。

ニヤリと意地悪そうに口角を上げ、胡桃が口を動かす。

「くくつ、まるで空っぽのような頭で考えてもみるがいいさ？　これから先、キミは我が架織乃家で生活していくつもりなのだろう？　つまりそれはだね、私やくんかたんにとって、何時如何なる時もキミに襲い掛かられて純潔を奪われやしないかと冷や冷やしながら一つ屋根の下で過ごさなければいけないという意味になるわけだよ。勿論、仮にキミがくんかたんに襲いかかるものならば、私の全存在を賭けてキミを亡き者にする算段なので問題はないのだがね。但し、たとえキミが私やくんかたんに襲い掛かる度胸も甲斐性もない情けない野郎だとしても、残念なことにキミにはサイコメトリーがある。数珠を外してお風呂に入る時、ちよつとした気の迷いから、その力を乱用でもしてみたまえ？　すると驚くことにキミの脳裏には私とくんかたんのあられもない姿がモザイク無しでこれでもかと映ってしまうわけだよ。さて、キミはそんなことが我が架織乃家において許されるとでも思うかね？　否、断じて許すまじ行為だ！　私のあられもない姿は視られても構わないというかむしろ視るがいいが、くんかたんのあられもない姿を見てもいいのは私だけだ！　だから今から見せてくれくんかたgかpつえざっ」

絶賛、キアラが崩壊してる姉が此処に一名。

そして、姉の口を塞いで窒息死させようと目論む妹が一名。お前から仲いいだろ、絶対。

「つまり胡桃、お前は変態ってわけか」

「そういうことさ」

「そういうことさ、じゃねえよっ」

清々しそうな笑顔できっぱりと肯定するんじゃない。対応に困るだろうが。

【2・2】

説明が終わり一段落したところで、胡桃はブツブツと呟きながら頷いている。時折、口元が緩んでいるのは気のせい、ではないか。絵的に怖いぞ、胡桃。その一方、訓夏はというと——おわっ、オレの顔をずっと見てるじゃねえか。眉間に皺を寄せちゃって可愛い顔が台無しだ、と言いたいたいところだが、不公平なことに可愛い奴はやっぱ可愛い奴のままだ。

「な、なんだ、訓夏？ オレの顔に何かついて——」

「ません。お姉ちゃんの戯言に鼻の下を伸ばす比喩を観察してるだけです」

「うぐっ、面目ない……」

これは軽蔑されちまったかな。いやいや、それ以前に訓夏の名前を憶えていなかった時点でオレに対する好感度は大暴落済みか。

「……お、お姉ちゃんには……譲らないんです……」

「ん？ ごめん声が小さくて聞こえな——」

「死ねと言いました」

「酷いっ」

姉妹揃ってオレを亡き者にするつもりかよ！

こうなったら意地でも胡桃と一緒に風呂に入ってやるんだからな！……あれっ。

因みに、オレが二人に説明した内容には、二つだけ嘘が混じっている。それは接触反応における対象の有無と、その行使力についてだ。

サイコメトリー可能なのは無生物のみと説明したが、実際には命ある生き物にも行使することができる。……だが、それだけは絶対に言えない。家族にさえ秘密にしている。

——何故かって？ そんなもん、人の心を覗きたくないからに決まってるんだろ。

人間って生き物は、誰しも二つの顔を持っている。表と裏、それぞれに異なる顔を張りつけていやがるんだ。上辺では、如何にも親切で頼りがいがあるって誰にでも優しく接するような万人が認める完璧な人間を演じていたとしても、それは表の顔でしかない。

そう、誰でも裏の顔は酷いもんさ……。

接触反応を好きな時に行使できるようになったオレは、その能力を遊び半分で同じ学校の奴らを対象に何度も試してみた。

バレないように、ちよつとだけでいいんだ。指先が触れるだけで相手の心の中を全て丸裸にできる。何でもお見通しのオレには、もはや誰も隠し事なんてできなかった。

幼い頃、オレの周りにいた奴らもまだガキだったから裏表がない奴も多かった。でもそれは小学校までだ。中学生になったら、クラスメイトはおるか学校中の奴らが全て嘔吐きで腹黒い人間にしか見えなくなっちゃった。

好奇心ではなく、相手の秘密を見つけるのが目的で、接触反応を行使する。その度に、オレはどす黒いものを見せつけられてきた。自業自得だってことは理解しているさ。

好きになった女の子の心の中を覗いてみたくて能力を行使してみれば、表面上ではいつも笑顔を振りまいていたというのに、裏では嫌悪しか生み出さないような素顔を見てしまうことがあった。視なけりゃよかったよ、人の心の中なんて……。

クラスで一番仲がいいと思っていた奴が、オレのことをどう思っているのか知りたくて接触反応を試みたこともあったな。結果は勿論、裏切りだ。心の中ではオレの存在を鬱陶しいと思っていたのを知ってしまった。

まあ、なんだかなと言っても全てオレの責任なわけだし、人の心を覗くような人間が聖人君子であるはずもない。オレは自分自身が人間として腐ってやがることに気づいていたし、同時にそれは誰にでも持ちえる感情であることを悟った。

最後にサイコメトリーしたのは、中学一年生の頃だったかな。そ

れ以降、一度だってオレは人の前でこの数珠を取ったことはない。家族の前でもな。……ああ、いやまてよ、そういえば一度だけ行使したことがあったか。

中学三年生の夏に、紛失物を見つげるために久しぶりに数珠を外して、Hさんに変態紳士と罵られて不登校になったことがあった。入学して間もない時期にHさんの本性を知って、幻滅して、そんな自分自身にも吐き気がして……、今となつてはいい思い出よ、バカらしいけどな。

そしてもう一つ、接触反応の行使力についてだ。

二人には、数珠を嵌めてさえいればオレが接触反応を試みても完璧に視えなくなると説明したが、それは嘘だ。数珠の効力とはつくの昔に無くなつてゐるんだからな。

数珠を嵌めたおかげで、初めのうちは何不自由ない生活を送ることができていたんだが、いつまでもこのままではいられないからな。数珠を外した状態でも生活していけるように、訓練することに決めた。それは数年がかりになったが、感覚的に少しずつ習得していくのが徐々にではあるが実感できるようになった。精神を集中させてみたり無意識の状態でも接触反応を行使しないように限定的に意識してみたり、正直、言葉で説明するのは難しいんだが、とにかくオレは無意識的な接触反応の行使を克服し、そして意識的に行使可能になったってわけだ。つまりは、訓練さえすれば、この能力を鍛え上げることも可能だ、ということになる。……まあ、精神的にも肉体的にもとんでもなく疲労しちまうから最近はやめてゐるんだけどな。

話の続きだが、接触反応を無意識に行使しないようになった頃、オレが通っていた小学校で？トキの迷宮？が流行り始めた。そういやオレも遊んでたっけな、と思い出して、オレの玩具を没収しては隠す専用の押し入れの中からデッキケースを探し出した。小学生になったオレは身長が伸びて、押し入れの中に上って入れるようになっていた。

だが、何故かな。デッキケースに仕舞ってあったカードの束は、水浸しにでもなったんじゃないかと疑りたくなるほどに皺くちやになっていた。川にでも落つことされたのかもしれないが、対戦には支障がないので我慢するしかない。

クラスメイトの奴と対戦するためにデッキを調整する必要があったオレは、皺くちやのカード一枚一枚をチェックすることにした。が、これがいけなかった。

山札を切る時、どのカードがどの位置にあるのか、接触反応を行使すれば全てを知ることができるんじゃないか、と考えたオレは、それがイカサマよりも卑怯な手であることを知りつつ、実行に移してみる。そして、数珠の紐が切れた。

紐を結び直しても、数珠の効力は戻らなかった。きつと、紐が切れた瞬間に効力を失ってしまったんだろう。

それから月日が経ち、オレは高校生になったが、数珠の紐が何故、切れたのか。その理由は今もまだ不明だ。まあ、日常生活する上で不便なことはなくなったから、どうでもいいんだけどな。

オレの家族には、数珠の効力が切れたことを教えているが、同時に数珠がなくとも能力を抑えられるようになったことも知っている。で、見た目以上に影響はなさそうなのが救いか。それも全てはオレが一つ目の嘘を吐いている故、なんだけどさ。

「釣枝、キミがどういう人物なのかこれで理解することができた。

……なるほどね、だから我が両親はキミの同居に賛成したんだねえ」
頷き終わったのか、またもや意味深な言い方で胡桃が興味を齎す。
こいつと一緒にいるだけで反応に困らないな、まったく。

「どういう意味だ」

「我が架織乃家がアンティークな品物を暴利な値段で売りさばく骨董屋もとい、ごみ屋敷であるのは周知の事実だが、それは表の姿でしかないのだよ。……実はだね、此処には怨念やら呪いやら悪霊やらが取り憑いた曰くつきな品物がたくさん眠っているのさ」

胡桃はオレの説明に対抗するかのように、あくまで現実っぽさを

欠いた話を進める。

「両親はそういった類のものが好物でね、海外へと出向いては購入し、家に持ち帰ってくるのさ。そのほとんどが元々は高価な品物なわけだが、曰くつきのせいで買い手がつかない。そのままでは売り物にもならないし経営を悪化させるだけだが、両親は？ 被い？ を生業としていてね、憑いているものを被い、高額で売りさばいていたってわけさ」

くくつと喉を鳴らし、オレの反応を窺う。訓夏は相変わらず黙ったままだ。

信じてくれと言われても、はいそうですか、と簡単に信じることはできないのが今の世の中だ。被い師の存在など一般的じゃねえからな。でも、オレは自分自身が非日常的能力を持っていることを知っている。

オレが口を挟まないでいると、胡桃はもう一言だけ付け加えた。

「だがね、我が両親は今現在、海外にいるわけだよ。曰くつきの品物を求め、どんな遠い場所にも足を伸ばしてしまうのが原因さね。品物を見つけては送ってくれるのはありがたいんだが、残念なことに私とくんかたんでは被いができない。……でだ、憑いた品が徐々に増えていき保管するのも大変になっていたところに釣枝、キミが来たわけだよ」

なんだか境遇が似ていやがる。オレの両親も海外で仕事をしているから、家ではいつも一人だった。こいつらは二人いるけど、それでもやっぱり親がいない状況ってのは何かと不安になるだろうな。

「……つまりオレは、お前らの両親に代わってそいつらを被えってことか？」

「うむ、その通りだね。家賃や食費などは心配せずともいいよ、キミはただ被い続けてくれればいいからさ」

「いや、オレにできるのは接触反応であって、被いとかはできないぞ」

家賃は両親が払ってくれるから問題ないし、毎月僅かだが仕送り

をしてくれるから食費の心配をする必要もない。両親様々だ。それに加え、オレはこの能力を人前で使いたいとは思わない。

万が一、数珠を外している時に胡桃や訓夏に触れてしまったら、オレは此処にいることさえ拒んでしまっただろう。それは嫌だ。……だが、

「その点は問題ないさ。接触反応によってどんなものが憑いているのか、キミには視ることが出来るのだろうか？　だとすれば被う方法が異なるだけであって、解決策を導き出すのも容易だと思うのだが」「簡単に言ってくれるなよな、……ていうか二人はどうなんだ？　両親が被い師ってことは、似たようなことができるんじゃないのかよ」

被いができなくとも、オレと同じように別の能力を持っている可能性がないわけではないはずだ。両親が被い師を生業としているんだからな。

「残念ながら私は無力で、か弱い人間さ。何もできないよ。……だが、」

ちらり、と視線を横に向ける。胡桃の視線の先には、訓夏がいた。「くんかたんには、ある！　私が持ち得ない最強最大の超人的能力が！」

「夕飯抜きにします」

「だがくんかたんは地球上でもっとも私に優しい人間であるからして夕飯の代わりに夜食を用意してくれるはず！　問題はない！」

「夜食も抜きですね」

「格なる上は冷蔵庫の中に仕舞ってあるくんかたんのお菓子をこっそり食べ——」

「食べたら一生涯口を利きません」

「ごめんなさい」

胡桃に続けと言わんばかりに、訓夏がけん制する。

聞き役に徹していたのに、話題の中心に自分が来ると同時にこれだ。まさか胡桃の口からごめんなさいという言葉が聞けるとは思わ

なかった。妹には頭が上がらないのか。

「なあ、訓夏はオレと同じような能力があるのか？」

しゅん、と反省の色を見せる胡桃ではなく、訓夏に直接訊ねてみる。

訓夏はあからさまに嫌そうな表情を浮かべ、胡桃を睨みつけた。

目線をそらしつつ、胡桃は反論する。

「一つ屋根の下に住んでいれば、いずれはバレてしまうさ。今のうちに言っておいた方が、くんかたんとしても都合がいいのではないかな？」

「……う」

齒がゆそうにスカートの裾を掴み、顎を両膝につけて俯いてしまふ。

「あ、いや別に言いたくないなら無理しなくても——」

「匂い……、です」

オレの言葉を遮り、ぼそりと呟く。

「……匂い？」

「嗅覚が、普通の人より……少し、いいです」

犬か、と突っ込みそうになったがなんとか我慢する。

俯いてはいるが、頬は真っ赤に染まっている。気持ちは分からないでもない。自分の秘密を他人に教えるのは恥ずかしいからな。ついさつき、オレも経験したところだ。

「えっと、それじゃあ……被いとかはできないのか？」

「できません。……けど、一度憶えた匂いは決して忘れることはありません。たとえそれが九年と四十八日間前の匂いでも、です」

「そ、そっか……」

被いには役に立ちそうにないか。というか何が九年と四十八日前なのか分からない。

「……まだ、気づかないんですね」

「ん？」

オレの反応を見るや、またもや訓夏は落胆してしまう。なんだな

んだ、オレはまた訓夏を傷つけるようなことをしてしまったんだろうか。

「さて、釣枝。被いができればあつという間に憑きものを被えるだろうが、キミにできるのはサイコメトリーだからね、どんなものが憑いているのかを確認し、どうすれば被うことができるのか、その答えを導き出すのは手間が掛かるだろう。これから暫くは苦勞をかけるとは思うがよろしく頼むさね」

「んー、そういうことなら仕方ないか。やれるだけやってみるよ。

……それにしてもなんで胡桃だけ何もできないんだろうな？」

「ぴきぴきー、それは暗に私を貶しているのかな？」

笑顔が怖いぞ、胡桃。あと、擬音を口で言うな。

「ああ、すまん、そういう意味じゃなくてだな、胡桃の両親は被いができるんだろ？ それに訓夏も……その、匂いに敏感？ なわけだし……」

名前を口にすると、訓夏の体がピクリと反応し、髪が揺れた。

「こほんっ、その件についてだが……私にはまだ愛すべき異性がないからだろうね」

「……は？」

訓夏を気にした素振りを見せず、胡桃は唇の両端をニンマリと上げた。

「架織乃家の裏には岩屋山^{いわやさん}という裏山があつてだね、そこには岩屋神社があるのさ。地元民でも滅多に足を運ばないほど寂れた神社なのだが、どうやらそこで異性同士が愛を誓い合つと、岩屋神社の神様とやらが祝福してくれることを風の噂と言う名の昔話を両親から聞かされたことがある。つまり我が両親はそこで愛を誓い合つたがゆえに抜いとしての力を授かったのだろうね」

岩屋神社か、なんか聞き覚えがあるような無いような、記憶が曖昧だな。

「ふーん、……え？ ということは訓夏にもその、そういう相手がいるってことか？」

オレと胡桃、二人の視線が訓夏へと集中する。

訓夏は顔を上げて、小さく頷いた。

「います。……でも、秘密ですよ」

「まあ見付け次第、私が殺すつもりなんだがね、ははは」

「さり気なく怖いことを言うなよな、胡桃」

視線をオレに向けたまま言わないでもらいたい。

「釣枝、そういうキミこそサイコメトリーというなかなか優れた力を持っているじゃないかね。ひよつとして、キミも岩屋神社で愛を誓い合ったことがあるんじゃないか？」

そう言つと、今度は二人の視線がオレへと集まる。

「岩屋神社か、……確かに、昔行つたことがあるような気がするんだが……でもオレにはそんな相手はいないしな」

「ふう、溜息しかでません……」

訓夏が項垂れた。^{うなだ}何故だ。

【2・3】

「では早速だがキミの力を拝見させて頂こうじゃないか。血湧き肉躍るとは、まさにこのことか！　と思いたくなるほどゾクゾクさせてくれたまえよ？」

「期待するのは勝手だけどな、別に大したもんじゃないぞ」

ガツカリされても困るだけだしな。

オレの話を聞いているのかいないのか、胡桃はソファーから腰を上げ、鼻歌混じりの声を上げながら部屋を出て行く。いったい何をするつもりなんだかな。オレの能力を見るんじゃないのか。

胡桃がいなくなり、今度こそ真正銘二人きりになってしまったわけだが、これも僅かな間に過ぎない。間違いなく、胡桃はすぐにも戻ってくるはずだ。

長すぎず、かといって短すぎない、微妙な待ち時間が非常にもどかしい。場を持たせるために再度、適当な話題を訓夏に振ってみー

スンスン……。

「……ん？」

これから毎朝、パジャマ姿の訓夏がオレの部屋まで起こしに来てくれるのか否かの真偽を確かめるべきか、悶々としながら頭を悩ませていると、隣から鼻を吸る音が聞こえてきた。……いや、そうじゃないな。これは匂いを嗅ぐ音だ。

お行儀良く隣に座っているであろう訓夏を、そっと横目で確認してみる。

「——ヒッ」

訓夏の顔が、すぐそばにあった。

驚きすぎて悲鳴を上げちゃったぞ、おい。

「あ、……う」

何をしていたのか不明だが、不可解な行動を取っているところをオレに目撃された訓夏は、恥ずかしそうに頬を染め上げていく。

「えと、……あー」

何をしてたんだ、と問いかけてみたい。

だがそれを躊躇わせるかのような瞳を向ける訓夏は、必死になつて何事かを訴えかけている。今にも泣き出しそうな表情を見ていると、ついつい苛めたくなってしまうが、これは好きな子に意地悪する男の子の心理と同じか。

「——おや、くわあい私の妹を苛めているのはどこのボンクラかな？」

と、そこに胡桃が姿を現した。いつの間に戻ってきたのか不明だが、せめて足音ぐらい響かせてほしいね。先ほども然り、姉の方は出待ちするのが趣味なのかとお尋ねしたい。

「オレはボンクラじゃねえよ。……で、何を持ってきたんだ？」

視線の先に映るのは、小さめの巾着袋が一つ。

「この中にはだね、私にとってくんかたんの次に大切な宝物が入っているのさ。それを今からキミに触れてもらい、何が入っているのかを当ててもらおうと考えているわけだよ」

「当てるだけでいいのか？ それだと接触反応しなくてもいいじゃねえか」

「触れるだけなら外側から見ても分かるだろう？ だから構うことはないさ」

言われてみれば確かにその通りかもしれない。中身に触れるだけで、まさぐらないようにすればいいだけの話か。触れた瞬間に能力を行使するだけで正解に辿り着くだろうな。

単純に、純粹に、明解に、二人がオレの能力について納得できるだけのものを見せ付けるだけでいい。それで満足しようがガツカリしようがオレには関係ない。まあ、余所余所しくなったり避けられたりするの精神的に厳しいけどな。

「よし、それじゃあ……」

数珠を外し、巾着袋の中に手をつっ込んだ。
さて、いったい何が視えるのやら。

「わくわく、ときどき、そしてにやにや」

「……あのさ、期待してくれるのはオレとしても嬉しいんだけどよ、胡桃は口を閉じてくれると嬉しいぞ」

「おや、キミの口で強引に閉じるだと？ そんなことが法律で許されているとも思っているのかい？」

そんなことは誰も言ってねえ。

「それともキミが指摘する？ 口？ とは、上ではなく俗に言う下の……キミ、早く私を止めたまえ。暴走すぎてキミに襲い掛かるかもしれないじゃないか。はあはあ」

「暴走したまま、どうか遠くに行ってくれ」

想像力が豊かすぎるぞ。そのほとんどが変態的な方向性なのが残念だが。

「乙女にこんなことを言わせるとはキミも罪を作りたがる男なのだね」

もういい、とりあえず無視だ。これ以上長引くと訓夏に睨まれかねない。いや、既に全力を持って睨まれているな。殺気が漏れてますよ、訓夏さん。

改めて、紛れた気を指先へと集中させてみる。

「……ん、これは……脱衣所か？」

巾着袋の中には、何か布状の物が入っていた。

まず、それを手で掴み、それから能力を行使してみると、とある記憶がオレの脳裏に映像として流れ込んでくる。

脳裏に浮かび上がってきたのは、脱衣所だった。

「誰か……着替えて……お、おお……、おおおう……こ、こいつはでか……って」

はっ、と我に返る。真っ赤な鼻血が垂れてた。
オレが視た記憶の断片、それは訓夏がブラジャーのホックを外す

シーンだ。

「くく……、くくくつ、視たな釣枝。この代償はキミの体で払ってもらってからそのつもりでいたまえよ？」

計画通りと言いたげな笑みを張り付けているのは、胡桃だ。

「おまえつ、最初っからそのつもりだったな！」

「いやまさか本当に視えるとはねえ、キミが鼻血を吹き出すまでは真偽が定かではなかったわけだが、初心な反応を見ているとどうやらキミの力は本物らしいね」

オレを試すのは構わない。証拠を見せるために能力を行使したんだからな。だが、だからと言って、視せていいものと悪いものの区別ぐらいはちゃんとつけてくれ。嬉しすぎるぞ、この野郎。もっと視せやがれ。

「お姉ちゃん、比念は何を視たんですか」

「知りたいかい、くんかたん？」

「知らせるなっ」

知られたら訓夏に抹殺される。

「……比念はわたしに隠し事をするんですか」

「ぐつ、いや……そういうつもりじゃ、なくてだな、世の中には知らない方がいいことも多少なりとも……ある、とオレは考えているわけであつて……」

「釣枝が視たのはだね、くんかたんの脱衣シーンだよ」

「うおおいこら待ていつ」

速攻でバラしやがったな、裏切者がつ。

「わたしの……です、か？」

ゆっくりと、訓夏が視線を向ける。

怖い。この緊迫したかのような空気が肌を突き刺しやがる。

「あ、ええええと、その……だな、うん……、視ました。ごめんなさい」

殴られるのを覚悟し、齒を食いしばる。

しかしながら訓夏の手が出ることはなかった。

「そう……、ですか。わたしの……脱衣シーンを……比念が……」
あれ、なんかそれほど悪い反応じゃなさそうだな。

と思ったのも束の間、オレと胡桃から注目を浴びていることに気付いた訓夏は、途端に眉根を寄せ上げて一言付け加える。

「比念は変態ですね」

なにこの落差。

ああそうだよオレは変態だよ悪いかこんちきしょーめ。

変態と罵られるのは慣れてるんだよ胡桃のバカ野郎が。

「たっ、確かにオレは訓夏がブラジャーのホックを外すところを視ちまったださ、だがこれはあくまでも胡桃に言われたから視ただけであって視たかったわけじゃないんだよっ」

「酷いです。見たくないのに、視たんですか……」

言い方が悪かったせいで、また訓夏を傷つけちゃった。どうすりゃいいんだよ。

「言い訳なんて見苦しいね、釣枝。真っ正直に認めたらどうだい、ボクは変態という名の紳士だよ、ってさ」

「オレはどこぞのクマ吉かつ」

今にも手錠を掛けられそうな雰囲気だ。

「ところでお尋ねしたいのだがね、キミはどこまで視たんかい？」

「……え、え？」

言葉に詰まった。

確信に迫ろうとするな、この話はこれで終わりにしてくれ。でないとオレが架織乃家から追い出されてしまうだろうが。

「巾着袋に入れていたのは私の宝物でもある、くんかたんのブラジャーなわけだが、キミが視たのがくんかたんの脱衣シーンということとはつまりくんかたんがブラジャーを取って上半身裸になったところも視たのでは——ああっ、ちょっと何をするんだいくんかたんっ、それは私の宝物なのだから取り上げるなんて殺生なことをしないでくれっ」

「お姉ちゃんも変態です」

「ふふふ、くんかたんはそれが最高の褒め言葉だということを理解しているのかな？」

開き直るな、変態め。

「言っておくがな、鼻血を出して集中力が切れたせいで、特に見たかったところは視れなかったからな」

「特に見たかったところを詳しく」

訓夏と共にブラジャーを引っ張り合い中の胡桃が追撃を仕掛けてきた。くそっ。

口は災いの元とはよく言ったものだ。

「それを言ったらオレに残された最後のプライドが崩壊しそうだから拒否だ！」

「キミにプライドがある……だと……？」

「なにそのオレにはプライドの欠片すらないですよ的な視線は！？」
そんな目で見ないでくれっ。

「で、くんかたんの脱衣シーンを視た感想はどうだい、釣枝？」

「でかかつダゴフツ——」

言い終わる前に、訓夏の蹴りがオレの顔面を捉えたのは言うまでもない。殺人的な威力の蹴りをありがとう、訓夏。おかげでオレのプライドはズタズタです。

「うぐぐっ、鼻血を出してるのに顔を蹴るなんて酷いぞ」

「変態が悪いんです。比喩は変態です」

「そうだぞ、釣枝。変態が全て悪いのだよ」

「そもそも誰のせいで鼻血を出してるのか説明してもいいかつ？」

四つ角を作りそうになりながら胡桃に文句をつける。それと胡桃お前にだけは言われたくないぞ。何せオレとお前は変態なんだからな。

とりあえず顔面が痛い。それと鼻の骨が曲がってないか心配だ。つていうか訓夏も座った状態からよくもまあオレの顔面に蹴りを入れることができたよな。普通に驚いたぞ。

ただ、その際、見えてしまったものに関しては口を堅くすべきだ

ろう。一点の穢れすら見当たらない純白のアレを、オレの目に焼き付けてやったんだからな。やはり脳裏で見るよりも直に見た方が何倍も有難味がある。

訓夏め、全力で放った蹴りの代償は大きかったということを後悔するがいい。

「比念はお姉ちゃんよりもド変態です」

ふしゅー、ふしゅー、と恥ずかしそうに息を荒げつつ、語尾を強めに言い捨てる。その姿がまたなんとも言えず可愛らしく、もっと叱りたいと一瞬ながら考えてしまった。

……女の子に詰られるのに快感を覚えたら人生終了か？

いや、ただのMだから何ら問題はないよな。多分。それもどうかと思うけどさ。

胡桃は自分で自分の肩を抱き寄せ、嬉しそうに身を擦る素振りを見せつけている。お前は何がしたいんだよ。弄りたいのか弄られたのか分からない奴だな。

「——ああ、因みにだが釣枝。今までに説明したことはほぼ全ての作り話だから忘れるがいいよ」

「……は？」

言い忘れていたことを思い出したかのように、ポンツと手を叩き、胡桃が口を開いた。

「我が両親に被いの力があるのは事実だがね、だからと言って曰くつきの品々を安価で買い取り暴利を貪っているのも偽りではないのだよ。そしてくんかたんが匂いに敏感であることも、更には私が変態淑女であることも確かなことだねえ。さて、今の説明でキミは私が言いたいことを理解できたかな？」

自分のことを堂々と変態淑女であると公言してはばからない姿勢は評価してやろうじゃないか。オレが変態紳士で胡桃が変態淑女、そして訓夏が……犬、かな。

「……えっと、つまり全て事実ってことか？」

「今、言ったことはね。くくっ……」

意味深な台詞でオレを惑わせないでくれ。裏がありそうで怖いだろうが。

するとここで、訓夏がぼそりと呟いた。

「神社のくだりも……事実、ですよ」

「ん？ 神社がなんだって、訓夏？」

「耳が腐りやがれて言いました」

「ひいっ」

恨めしそうにオレを睨みつける胡桃の妹の考えてることが全く理解できませんっ。

「ついでに言うのだね、私がキミと共に寝食及び入浴を共にしても構わないというのも嬉しいことに事実だから両手を上げて喜ぶといよ」

「それは遠慮しておく」

非常に残念だが、訓夏に軽蔑されたら此処に居づらくなるからな。

……くっ。

いや待てよ、訓夏には既に軽蔑されていると言っても過言ではないわけだ。それはつまりオレが胡桃と共にあんなことやこんなことをする羽目になっても今更どうってこともないわけであって……いかんいかん、どうやら本格的に頭がおかしくなってきたらしい。刑務所の中からクマ吉が手招きしてやがる。

「そついえば二人の両親の代わりに被いをするってのは事実なのか？」

「あ、それは嘘さ」

「嘘かよっ」

手間が掛からずに助かったけど、拍子抜けしそうだ。

「でもよ、それだと曰くつきの品物を被うことができないんじゃないのか？」

「安心したまえよ、ワトソンくん。我が両親は被い済みの品々しか送ってこないのさ」

それを早く言え。無駄にオレを驚かせようとしゃがって。

接触反応でどうやって抜えいいのか真剣に考えそうになった時間を返してもらいたい。

「まあ、中には抜い忘れた品が無きにしも非ず……だがね？」

胡桃は片目を閉じ、唇の端を意地悪そうに上げる。

もう嫌だ、こいつの相手をするのは疲れたよ。今日はぐっすりと眠らせてくれ。

「さて、キミのおかげで中々に有意義な時間を過ごすことができたね。心から感謝するよ、釣枝。くくくつ、いやご苦労さま」

「ただの暇つぶしかよ」

「何か問題でも？」

悪びれた様子もないのが胡桃らしい、か。

「サイコメタラーくん、これから先、探し物がある時には宜しく頼むよ」

「メタラーじゃなくてメトラーだからな」

「ははは、どうでもいいよ」

オレの秘密を暴露したつてのに、このあしらわれ方はあんまりだ。所々に棘のある言葉をぶつけるのは姉も妹も同じってことかよ。オレの心を傷つけるのは止めてくれ。でないとマジで一緒に風呂に入つてやるからな。

……と、ここでオレの腹が鳴る。

「おや？ オナラのような音が——」

「オナラじゃねえっ」

朝ごはんを食べてから何も口にしていなかったからな、そろそろ昼飯を食べておきたい。

「比喩、お腹空いたんですか」

腹の音を耳にし、訓夏が問いかけてくる。

「ああ、昼飯はまだ食ってないからな。ここら辺で飯を食えるところってあるか？」

「あります。一つだけ」

一つだけか。案外少ないけど一つもないよりはいいだろう。

今後、その飯屋にはほぼ毎日お世話になりそうだと。

「丁度いい、今から案内してくれないか？」

「分かりました……。それじゃあ、ここに居てください」

「おう、分かった。……ん、どこに居ろって？」

「ここに、です」

居間に、ってことか。

いやいや、何故に居間にいなくちゃなんのだ。

「……わ、わたしが……作りますから」

すると、訓夏は座布団から立ち上がり、深呼吸をした。

「訓夏が？ それってつまり、手料理ってことか？」

「それ以外に何がありますか？」

きつめの口調で言い返され、オレは口を閉じて首を横に振る。

「だから、少しの間……待っててください」

待っててください、だと？

やばいな、訓夏が可愛いすぎて出し損ねた鼻血が噴出してきそうだと。

「くんかたん、大切な姉の分も宜しく頼むさ」

「比念に手を出さないなら、考えます」

条件にオレが混ざってますよ、訓夏。

「うぬう、どうにか譲歩できないかね？ 釣枝に手を出せないとい

うのは私にとって非常に辛いものがあつてだね……」

ブツブツと呟きながらソファから腰を上げ、訓夏の後を追って

台所へと向かった。

可愛らしいカーテンで遮られた先から、架織乃姉妹のじゃれ合う声が聞こえてくる。主に姉の方が妹にちょっかいを出す形式なのが姿を見ずとも耳だけで判断できるのは何故だろうな。乱入するのは難しそうだ。

「前途多難だな、こりゃ……」

とりあえず今は昼飯にありつけるのを心待ちにしておこうじゃないか。

訓夏の手料理を、な。

【幕間（くんかたん劇場？）】

【幕間（くんかたん劇場？）】

「うぐぐつ、鼻血を出してるのに顔を蹴るなんて酷いぞ」

「変態が悪いんです。比念は変態です」

「そうだぞ、釣枝。変態が全て悪いのだよ」

「そもそも誰のせいで鼻血を出してるのか説明してもいいかつ？」

むふふふつ、わったしつの、靴下つに！ 比念の鼻血がついた
ー！

ひゃっほー！ きたよー！ かみさまありがとーですー！

このお礼は比念の命令には絶対に従わなければならない権利で手を打ちましょうじゃないですか。いやそれってどう考えてもご褒美ですよ？ ええそうですね、わたしにとっては特大級のご褒美ですからっ！

比念はわたしに何を命令するんですかつ？

オレの匂いを嗅げって言われるんですかつ？

勿論構いませんよっ！ 嗅がせてっ！ 比念の匂いを嗅がせて！
むしろ嗅いでっ！ わたしの匂いを身体中余すところなく嗅ぎ回してえっ！

でもダメですっ、そんなに顔を近づけたら恥ずかしすぎて真正面から比念の顔が見られなくなるじゃないですかっ！ でもでもそれでも比念は嗅ぐんですよね？ 無理矢理わたしの匂いを嗅ぐんですよねっ？ ええっ、我慢しますよ！ それが比念の望みなんですからっ！ だから匂いはっ、わたしの匂いはっ、お気に召しましたか

っ？

そしてわたしの体はお召し上がりになりますかっ！？

……はあっ、はあ……っ、ふう……っ、興奮しすぎて体が火照ってしまいましたね……。

こんなわたしを見て、比念はまたよからぬ妄想をするんですよね？ そんなことは想定範囲内なんですからね。思う存分にわたしを使って妄想するといいですよ。そして妄想だけで我慢できなくなったらその時は遂にわたしに手を……手をっ、手を出すんですね！今夜は比念が夜這いに来るかもしれませんからベッドに横になって待機！ ということはつまり栄養のあるものをたくさん食べておいた方がよさそうですね、いろんな意味で！

鼻血を出したせいで鉄分が足りなくなるかもしれませんから、その代わりに私の真心と愛情と匂いがふんだんに込められた手料理で悩殺してやるです！

顔を蹴るのはさすがにやりすぎかなーって思いましたけど結果オーライですよね？

だって比念は優しいはずだもん。わたしに対する感情も接し方も態度も全て全て特別だから問題ないですよねっ？

にしし、この靴下は洗わないで大事にとっておかなくちゃですね。お姉ちゃんに見つからないように、いつものあの場所に……っど、その前に、比念の血の匂いをまだ生暖かいであろう今のうちに嗅いで脳髓を刺激しておきたいですね。

お姉ちゃんは……よしっ、居ませんね。

わたしの部屋の中には勝手に入らないように言いつけてありますから一安心です。

これだと思う存分に比念の血の匂いを嗅げるってもんですっ！

くん……くんくん……はすはす……あふあっ、くんかくんか……

っ。

……もう、だめ。……の、のうみそが……溶ろけそう……です……
……んっ、あ……っ。

いかんです、いかんです、こんな素晴らしいことをしてる場合じやありませんでした。

比念の匂いを堪能するのは寝る前になってからにしましょう。いやでも寝る前に堪能したら興奮して眠れなくなる可能性大なのが気になりますね。……うっっ、でも今はとにかく我慢です。今現在、わたしには比念をデートに誘うという人生最大級の試練が待ち受けているんですからねっ！

これで比念との距離をぐぐつと縮めて、手を繋いで、肩を並べてはすはす……じゃなくてっ！ わたしとの約束を思い出させてやるですよ！

待っててくださいです、比念ッ！

必ずや、わたしのことが好きで好きでどうしようもないほどの変態であった頃の比念を取り戻してみせるんですからねっ！

……くん……くんかくん、か……、……はっ！？

【3・1】

【三章】

——彼女の手料理。

それは、彼女を持つ男性にとって至福の時を約束するであろう神の御業。

——彼女の手料理。

それは、彼女を持たない男性が彼女を持つ男性に憎悪を抱かせるに十分な調味料^{スパイス}。

——彼女の手料理。

それは、三次元に愛想を尽かした人間が二次元の女性により振る舞われるであろう偶像。

——では、彼女ではない女性の手料理とは如何に？

「……も、もどかしい」

女の子が手料理を振る舞ってくれるなんて、オレが今までに生きてきた人生の中で初めての出来事だ。だからこそ、この待ち時間もどかしい。

そわそわすればいいのか、胸をドキドキさせればいいのか、はたまた台所に立っているであろう女の子に「なあ、訓夏。キミの手料理は確かに食べたいさ。でもオレが本当に食べたいのは……訓夏、キミだよ……」とか変態紳士的な腐った台詞をプレゼントすればいいのか、全くもって理解不能だ。訓夏の反応が気になるところだが、わざわざ殴られるようなことを言うのもMすぎるので止めておこう。だが、このままじっとしておくのも辛い。台所の様子を見に行ってみるか。

勝手に台所に入って怒られそうな気がしないでもないが、まあなんとかなるだろう。

「おい、訓夏」

スツとカーテンを横に引いて、中を覗いてみる。
するとそこは桃源郷——じゃなくて修羅場だった。

「くっ、うぬう……やるねえ、くんかたん。わたしの攻撃をかわすとは……」

「おい胡桃、何をしてんだよ」

訓夏の邪魔をする姉を一名発見。この調子だといつまで経っても昼飯にありつけないぞ。

「……ん、おや？ 釣枝じゃないかね。キミは何故ここに入ってきたのだね？ 今、キミが足を踏み入れた場所は女性にとつて戦場なのだよ？ そんなところに変態が入ってきてはダメじゃないか」

「いや、訓夏が料理を作つてるところを見てみようかと——って、変態は関係ねえだろうが。っていうかお前、つまみ食いしてんだろ、口元に食べかすがついてるぞ」

「ごちそうさまでした。そして再びいただきます」

「いただきますするなっ」

胡桃が手を出しては、訓夏が手を叩く。

もう一方の手で料理に手をつけてつまみ食いすれば、訓夏が足を踏む。その繰り返し。

なんだこの堂々巡りは、しかも作つては食べられてるから一向に料理が完成しないぞ。

「それ以上食べると太りますよ、お姉ちゃん」

「くんかたんの手料理で太らされるのなら本望さ。今私良いこと言つたね、キミ？」

「同意を求めるな、つまみ食い野郎が」

おかずを用意するのを諦めた訓夏は、フライパンに熱して油を引き、米と卵、それからコンショウをパウルに投入する。訓夏流では、フライパンで直接炒めるようなことはせず、米の一粒一粒を卵と絡める作業から入るらしい。更にマヨネーズを加えていく。オレが自分でチャーハンを作る時はいつもまとめて炒めていたからな、なん

だか新鮮だ。

卵を絡めたご飯をフライパンに投下し、チャーシューを細かく切ったものと、ネギを入れて炒めればあつという間に完成だ。

「さあて、お箸と小皿を用意して……っ」と

「食べる気満々だな、おいっ」

いくらなんでも食い意地が張りすぎだ。もつと自重してくれ。

「手掴みの方が絵的にエロくてよかったかい？」

「そういう問題じゃないっての」

「油によつて存分にテカったお米さんを親指と人差し指と中指でほんの少しだけ摘まんで、そのまま口元へと持つていく仕草にキミは興奮するのだろう、違つかね？」

まずはオレに否定をさせろ。そしてそれ以上勝手にオレの印象を操作するんじゃないやねえ。

「訓夏の邪魔になるだろ、向こうでオレと一緒に大人しくしてろ」

「それはダメです」

と、訓夏が口を挟んできた。

「比喩は、お姉ちゃんと二人きりになったらダメです」

「くくくつ、私の身を案じてくれているのだね、くんかたん？ 確かに私と釣枝が二人きりにでもなってしまうえば、私の魅力に我慢の限界が訪れあつという間に襲われてしまうだろうさ。だがね、私は既にこの身を捧げる準備はできているのだよ。釣枝以外の男には今までに指一本触れさせてこなかったからねえ」

「むしろオレが襲われそうな気がするんだが……」

「はは、面白いことを言うね、キミは。……まあ、それもアリか」

胡桃も少しは否定してもらいたい。まさか本当に襲うつもりなのか。案外有り得そうで怖いぞ。仮に現実に起こってしまうえば、オレはついに童貞を卒業することに——とか言ってる場合じゃねえな。

胡桃は顎を上げ、摘まんだ米粒をゆっくりと口元に近づけていく。それを舌で絡め取り終わると、今度は油に塗れた指先を丹念に舐め回す。そう、丹念に……。

レロレロ、レロ、レロレロレロ……。

……変態だ、マジで変態だよ、こいつ。オレなんか比じゃねえぞ、人前でそんな真似ができるなんて変態以外の何者でもねえつ。オレの貞操の危機がすぐそこまで来てる！

「……釣枝、唾を飲み込んだりしてどうしたのだね？　もしかして興奮したのかな？」

「……えっ」

指摘されて初めて気づいた。

オレは胡桃の仕草に翻弄され、生唾を飲んで胸を高鳴らせている。……うん、オレも変態だよ。だから一緒に檻の中に入ろうぜ、胡桃。

「できました」

胡桃との変態的な応酬が続けていると、お皿を持った訓夏がオレと胡桃の間に割って入る。どうやらいつの間にかチャーハンを作り終えていたらしい。体を張って胡桃のつまみ食いを制した甲斐があったってもんだ。

「おおう、こりやまた美味そうだな」

とてもいい匂いがオレの鼻孔をくすぐる。

腹の具合もそろそろ限界だからな、早く食べてしまいたい。

訓夏の背中を追って居間へとＵターンし、再度座布団に腰を下ろす。隣に座るのは勿論、訓夏だ。胡桃はどこにいるのかと言うと、まだ台所にいるのか？

「ふふっ、気が利くお姉さんが麦茶を注ぎ足しに華麗に参上」

麦茶の入ったボトルを手に姿を胡桃が見せる。もう片方の手には幾つかの氷が手掴みで握られていた。

「ほら、ちよいと失礼するよ」

氷を二つずつ、コップに投入。更に足りなくなつた麦茶を注ぎ足していく。つまみ食いは勘弁してほしいが、確かに気が利くな。その反動が酷すぎるのが難点だが。

「サンキューな」

「スプーンは……くんかたんが持ってきているね」

はふう、と息を吐き、訓夏が頷く。っていうかオレの分だけしかないのか。

「二人は食べなくていいのか？」

「食べさせてくれるのかい？」

「比喩が……わたしにですか？」

「よし、まずは二人とも落ち着こうか」

二人揃って勘違いしないでくれ。突っ込み役つてのは疲れるんだよ。

相変わらず、すぐ隣には訓夏が座っている。オレが訪ねてきたせいで、未だに制服のまままだ。正座をして両こぶしを膝の上に乗せている。オレがチャーハンを食べるのを今か今かと待ち続けている姿が愛らしい。抱き着きたいね。

胡桃はというと、今度はソファーには座らずにオレの左隣に座り込んでいる。床に敷いたカーペットが柔らかいから座布団なしでも問題ないってことか。しかし胡桃、スカートを穿いたまま体育座りをするのは目のやり場に困るから今すぐに態勢を変えてくれ。

「ほら、早く食べたまえ。なんなら私が食べさせてあげようか？」

「自分で食べるっての」

訓夏と胡桃に挟まれて、ジッと見られたまま、オレはスプーンを手にする。異様な緊張感が主にオレの右に座る訓夏から発せられているのは誰の目にも明らかだ。因みにもう片方はニヤニヤと唇の端を釣り上げている。

「それじゃあ、いただきます」

「い、いただかれます」

訓夏の言葉を合図に、オレはチャーハンを口にした。

……うん、美味い。オレが作るチャーハンに比べて、米が固まらずにパラパラになっているのが特徴か。

作り方をほんのちよつと変えるだけでこんなにも食感が異なるんだな。お店で出されても十分に満足できる仕上がりだ。

「……どうですか」

緊張した面持ちで、訓夏が喉を震わせる。

「美味しいよ。凄く」

「そ、そうですね……。よかったです」

率直な感想を告げると、訓夏は満足そうな笑みを浮かべた。笑顔を見るのはファースト・コンタクト以来だ。怒った顔も可愛いけど、やはり笑顔が一番だな。

「くんかたん、私の分はまだかね？」

「材料なら台所に置いてますよ」

さり気なく酷いな、訓夏。

「そっぴや二人はお腹減ってないのか？」

オレだけが飯を食ってるのも悪い気がしないでもない。

「学校でお弁当を食べてきました」

「私はくんかたんのお菓子をこっそり食べたわけだがまだお腹が減っていったたくんかたん何故叩くのだね」

とりあえず、二人とも今はまだ食べなくても大丈夫ってわけか。

胡桃が横からちょっかいを出してくるのをかわし、これでもかとおぶつけてくる訓夏の視線を意識しつつ、五分も掛からずに全て食べ終えてしまった。

「ふう、美味かったよ。ありがとな、訓夏」

「どういたしまして……です」

恥ずかしそうに身を振りながら訓夏は返事をする。いちいち仕草が可愛いな。

訓夏は皿とスプーンを持って立ち上がると、台所へと持っていく。後片付けまでもらって申し訳ないくらいだ。

「キミ、満腹になったのなら次は架織乃家の中を案内しようか」

「お、そりゃいいな。宜しく頼むよ」

胡桃に言われ、オレは頷いた。

今日から架織乃家にお世話になるわけだし、色々と知っておいた方がいいこともあるだろう。訓夏と胡桃の部屋に間違っ入っちゃ

わなないように気をつけなきゃならないし、それにオレの部屋……が
あれば嬉しいが、果たして空き部屋があるのかな。まあとにかく、
実家から持ってきた荷物をなるべく早いうちに解いておきたい。

「……お姉ちゃん、比喩を案内してください。わたしは、その……
、ちよつと用事がありますから、部屋に戻る必要が……あるんです」

「ふむ、任せよう。この恩はくんかたんが身に着けた下着類で手を打ってあげるさ」

「脳みそ腐りやがれです」

捨て台詞のようなものを吐いて、訓夏は居間から出て行ってしまった。

残されたのは、オレと胡桃の二人だ。

「……くく。さあ、邪魔者は消えたよ？」

「反応し辛いことは言わんでいいからな」

胡桃の発言全てに突っ込みを入れるのは訓夏並みの熟練度でなければ不可能だ。オレにはまだ荷が重すぎることにしておきたい。ぶっちゃけ疲れるからな。

「釣枝、キミはもっとノリがいいと思ったが……というか女性に興味がないのかね？　もしや男が好きだとでも——」

「オレは女が好きだっ」

つい先ほど出会ったばかりの女の子の前で、オレはいったい何を堂々と女好き宣言してるんだ。バカか。否、変態か。

「それは安心した。キミが男好きでは私も困るからね」

「そこはむしろ困らんでいい」

どうせオレをからかって遊ぶつもりに違いない。現在進行形でこの調子なんだからな、これからの日々が思いやられるぞ。

【3・2】

「ほら、私の後についてくるといいよ」

胡桃に手招きされ、オレは廊下に出ると、階段を下りて一階へと向かう。

「一階の半分は店舗になっているから説明はいらないね。暖簾に仕切られたこちら側に、トイレと洗面所、それとお風呂があるからね」
架織乃家は、横に大きい。店内だけでも随分と広いのに、更に居住スペースが存在する。

「トイレは二階にもあるから、好きな方を使えばいいよ。……余談だが、私は主に一階のトイレを、そしてくんかたんは二階のトイレを使用する頻度が高いからね」

必要あるのか否か不明だが、二人の補足情報をオレに伝えて何を期待していやがるのやら。トイレは覗かないぞ、トイレは……。え？
「あと、こっちにはもう二部屋あって、一つは店番に疲れ切った私が火照った体を存分に休める秘密の部屋で、もう一つは物置になっているねえ」

「ふーん、秘密の部屋か……」

ツツコミはいれない。

どうせ言い返されちまって、からかわれるのは目に見えているかな。

「気になるかい？ なんなら覗いても構わないのだよ？」

「既にドアを開けて中に入ってる奴が言う台詞か」

「ああ、違う違う。私がこの部屋で休んでいる時に覗いても、言っているのさ」

「遠慮しておこう」

此処に住んでいるのはオレと胡桃だけじゃない。一つ屋根の下に訓夏も住んでいるんだ。

そんな危険な状態で胡桃の姿を覗きに行く勇氣は残念ながら持ち

合わせていないんでな。

「まあ、興味があつたらいつでも覗きに來るといいさ」

肩を竦める胡桃は、部屋の中に入ってこいと手招きをする。

秘密の部屋の中は特に大したことはない。四畳半の和室だ。

「もう一つだけ説明を付け加えるのだね、この部屋は奴隷の……じやなくてバイトの子が着替えたり休憩したりする部屋でもあるのさ」

「今お前、さらりとヤバイこと言つたよな」

「聞き間違いだと思うよ？ 奴隷なんて一言も言つてないさ。バイトが奴隷だなんて」

「二度も言つなっ」

聞き逃したかったが、耳に残つた言葉がオレの口を動かしてしまつた。くそっ、胡桃と話しているとツツコミを入れるのがデフォルトになつたかのように錯覚しちまうぞ。

「一階はこれで全部だね。さて、次は二階の案内をしようじゃないか」

胡桃は一階の案内を手早く済ませ、階段を上つていく。架織乃家を案内するのが楽しいのか、胡桃の足取りは軽そうにみえた。

「簡潔な説明だな……って、おうっ」

オレは、その後ろ姿を見上げ――て、見えた。

一度目は暖簾に阻まれてしまい覗きに行くことすら躊躇われたイベントだったが、胡桃の奴め、不意打ちとはなかなかやつてくれるじゃねえか。口調に似合わぬ可愛らしい色と形と柔らかそうな張り具合を一瞬とはいえ堪能させてもらったぞ。あくまでも事故でな。短いスカートを穿くから、こんなことになるんだ。自業自得だ。あくまでも事故だぞ。

「事故だ、事故。……うむ、オレは悪くない」

口元がにやけるのを強引に押し隠し、伸びた鼻の下に力を入れる。あら不思議、あつという間に不自然な顔の出来上がりだ。

「……？ どうしたんだい、キミ」

不審な行動はしていなかったが、オレの呟き声が聞こえたんだろ

う。

階段を上る途中で胡桃は振り返ると、上から見下ろしながら問いかけてくる。

……だから、その立ち位置がヤバいんだよ、胡桃ツ。これ以上オレを喜ばせるなっ。

「い、いや……、なんでもない」

そう、これは決して大したことじゃないんだ。ただ、ちょっとした偶然により見えてしまったただけのことであって、気まぐれの神が与えたもった産物なんだよ。

胡桃には気付かれていないというのがまた、素晴らしいシチュエーションへと誘ってくれる。……うん、これは事故だが、やはりオレは変態だ。とつくの昔に自覚してい——、

「スカートの中が見えていることなら初めから気付いているから構うことはないさ」

「って、気付いてんのかいつ」

「見せてたからね」

「痴女か！ お前は痴女かつ！」

偶然を装ってわざわざ見せてもらっていたにも関わらず、ガキみたいにはしゃいでたのがとてもなく恥ずかしい！

誰かタイムリープをして数秒前のオレの存在を消し去ってくれいっ！

「しっかりと目に焼き付けたかい？ くんかたんの脱衣シーンと比べれば些か刺激分が劣るだろうが、直に見るのはやはり心躍るものがあるのではないかな？」

変態は変態の思考を読み取る能力があるんじゃないやねえだろうな、おい。

「オレにはお前の考えが全く読めねえっ」

「そりゃそうさ、私という人間の全てを知る者は私以外には存在しないのだからね」

「意味が分らんことを言うんじゃないやねえっ、っていうか何故見せた

！ お前も一応女の子なんだから恥ずかしくないのかよ！？」

「ふむ、確かにキミ以外の人間に見られたのであれば恐らくは殺人を犯す自信があるだろうね。だがかしながら今回の相手はキミだ。羞恥心など、嬉しさと快感によって無限にカバーすることが可能さ」

「そこはカバーするなっ、むしろ恥ずかしがれよっ」

胡桃だつて女の子なんだから羞恥心ぐらい持つてくれ。そうでなければこっちの楽しみが半減す——ゴホッ、ゴホンッ、おっと危ない、本音が出そうになった。

「しかしまあキミが私を女の子として意識してくれることが判明しただけでも十分な収穫があつたよ。これで私も一安心だね」

言い終わるや否や、右手の親指を立ててみせる。

何が一安心なのかお尋ねしたいところだが、更に話が捻じれそうな予感がするので止めておこう。それが無難だ。というか、そうする以外に道は残されていない。

スカートの中を二度見するような度胸を発揮することなく、少々俯き加減で階段を上る。

「キミがくんかたんの手料理を堪能したのが居間で、隣にあるのが両親の部屋だね。そしてその横に二つある部屋のうち、こちら側が私の部屋さ。夜這いする時はくんかたんの部屋と間違わないように気を付けるといいよ」

「しないから問題ない」

と思つておこう。理性の歯止めが掛けられるか不安だがな。

オレは二階の廊下で立ち止まり、胡桃の説明を受ける。変な態度を取つてみせたり人をおちよくつてるかのような口調で喋ったりすることがなければ、万人が認めるであろう可愛さを持ち合わせているつてのにな。……しかしまあ、それだと胡桃の印象ががらりと変わったちまつて、今みたいに気を遣うことなく会話することもできなかったんだろうけどよ。

「二階の案内は以上で終了となるね。さて、最後にキミの部屋だが

……」

二階には、居間と架織乃家の両親の部屋、それから架織乃姉妹の二部屋があった。

ざっと見たところ、オレの部屋になりそうな場所はどこにも見当たらない。つまりこれは胡桃か訓夏との同部屋フラグが発生したってことに――、

「一階の物置部屋を自由にするといいよ」

「あ……、そう」

こちらを振り向き、顎でオレの後ろを指し示す。

「おや、キミの部屋があるというのに、あまり嬉しそうではないね？ ……ふむ、ひょっとしてキミは私と同じ部屋で眠ることができるとでも思っていたのかな？」

「断じてない。全くな」

勿論、嘘だが。

「くくつ、それは安心したよ。やはり一つ屋根の下に住む者同士、相手の部屋に忍び込むという危険を冒しながらも逢瀬するのが楽しいのだからね」

「オレの部屋には鍵をつけてくれ、襲われる危険がある」

「合鍵を作ってくれるのなら喜んで」

「それじゃ意味がねえだろつ」

恥ずかしさを紛らわすため、怒ったふりをしてみせる。そしてオレは心の中で自分自身に呆れ果てる作業を繰り返す。つくづく勿体ない男だな、ってな。

こんなにも素晴らしい状況には今まで生きてきた中でたった一度もお目に掛かれたことがないってのに、それを断り続けるだなんて阿呆か。変態紳士としての名が廃るってもんだ。据え膳食わぬは男の恥だぞ。

胡桃は、明らかにオレを誘っている。仮にそれがオレをからかっているのだとしても、数年振りに顔を合わせた人間に対して、そんな態度を取ることができるだろうか。

好意を抱いてくれているから、そういう態度を取っている、と考

えた方が利口だ。

胡桃が何故オレにそのような感情を抱いているのかは知らんが、このまま拒否を続けていれば、いずれは胡桃のアプローチもなくなってしまう、オレは一つのフラグをへし折っちまうことになるだろう。

そんなことが許されるものか。……否、断じて許されるわけがない。

だが、残念なことにオレは普通の人間ではない。接触能力という力を持っている。それが枷となり、オレに積極性を無くさせている。接触反応によって、人が持つ記憶の断片を盗み視るようなことができるなければ、オレは今頃、変態として開花していたのかもしれない。それはそれで嫌だけどな。

だが、如何せん今のオレは人の心を覗き視ることが可能だ。たとえ工口いことが好きな年頃とはいえ、接触反応によって色んなものを視ることができるっていうのに、自分自身に言い聞かせておあずけ状態を続けているわけだから、むっつりスケベになるのは確定事項だったと言えよう。……自分で言ってる情けなくなるけどな。

表面上では紳士を装ってはいるが、根底にあるのは変態そのものだ。これまでのやり取りも全ては胡桃の調子に合わせて上辺だけで対応していると言っても過言ではないだろう。

ただ、自分が満足できればそれでいいとか、そんな考え方は到底できそうにない。

だからこそ、接触能力を持つようになったオレは、人に接する時に一定の距離を保つように心がけている。あまり近づきすぎて仲が良くなったとしても、実際にはオレのことを嫌っているのかもしれないって考え出すと止まらなくなるからな。

人と仲良くなって人を疑うようになるぐらいなら、仲のいい奴なんていらぬ。それがオレの出した結論だ。

「ほら、キミの部屋を見に行かなくていいのかい？」

胡桃は階段の前で立ち止まり、足先をパタパタとさせている。こ

いつは無駄に素振りが多いよな。あまりにも多すぎるから全てが演技に見えるが、ワザとらしすぎるのが逆に演技なんじゃないのかと疑ってしまう。

「さっき一階に降りた時に教えてくれりゃいいのに……」

「それだとキミと共にいる時間が数秒間短くなってしまうじゃないか」

これ見よがしな言い方をする胡桃は、オレの返事を待つことなく階下へと向かった。

足取りが軽く見えるのは気のせい……ではない。こいつは本当に何を考えてるのか分からない奴だよ。

「……つたく、仕方ねえな」

と言いつつも、オレは口元を緩める。

勿論、接触反応を行使すれば、胡桃の本心を知ることが可能だ。

嘘か真か、真実は呆気なく明かされるだろう。

だが、接触反応を行使しなければ、訓夏や胡桃の裏の顔を知ることもない。姉妹揃って何を考えているのかよく分からないけど、それならそれで構わない。人間は嘘を吐く動物なんだから、それが当たり前なんだしな。

他人と仲良くやっていくには、知らないことも沢山あった方がいい。だからオレは現状維持で問題ない。

「やあ、来たね。待ちくたびれたよ」

「ほんの数秒間、待ってくれてありがとう」

「どういたしまして。お礼は私の部屋にキミを招待する権利で手を打とうか」

ああ言えばこう言うのが得意な奴だ。

オレは部屋の中に入ってみたが、物置部屋と称する割には整理整頓されていて、実家から持ってきた荷物を入れてもまだ余裕がありそうだ。勉強机と本棚、ベッドまで用意されている。不自由することはないさそうだな。

「綺麗な部屋じゃないか」

「そりやそうさ、ここに置いてあつたものは全て売り場に出してしまつたからね」

「なんですと!？」

どうだ、嬉しいか、と言いたげな表情でオレを見上げる。反応に困るから止めてくれ。

「え、えと……、オレの部屋を用意するためにそんなことして大丈夫なのか？」

架織乃骨董屋の店主であろう胡桃の両親は、商品の買い付けのために海外へと出向いているらしい。それなのに、たとえオレのためとはいえ、勝手に商品を店先に出してしまつていいものなのか。後から怒られても責任取れないぞ。

「はて、キミはもう、私が言ったことを忘れたのかい？ 此処の責任者は私なのだが」

「は？ ……いや、あれつて嘘じゃなかったのかよ」

そういや、確かに胡桃は自分が責任者だとか言つていた。だがあれは自己紹介のついでに、その場のノリで付け足したんだろうと理解していたんだがな。

「なんだね、未成年が責任者をしては……、純真な心の持ち主である私が最高責任者をしては不服だとも言いたいのかな？」

「分かつた、分かつたから言い直すな」

架織乃骨董屋の店主は、訓夏と胡桃の両親に決まっている。そんな先入観を持っていたオレが悪かつたわけだ。まあ、普通なら誰でもオレと同じ結論に達すると思うけどな。

「これから三年間、この部屋はキミのものだ。私の体と共に好きにするがいいよ」

「うん、この部屋だけ好きにさせてもらうな」

ツツコミを入れずにかわそう。それが無難だ。

これにて架織乃家の案内が終了した。

胡桃にからかわれながら説明を受けたのが原因か、主に精神的な面で疲れが溜まつた。

だがこれで、ようやくと一段落だ。

「胡桃、オレの荷物を運んでもいいか？　いつまでも店内に置きっ放しにしてるってのも邪魔だろうし……」

と、安堵したのもごく僅かな間で、荷を解く作業が残っているのを忘れていた。

「ああ、勿論だとも。ここはキミの部屋なのだから何を持ち込もうがキミの自由さ。たとえば私とか――」

「よし、荷物取ってくる」

「おいキミ待ちたまえ」

早足で暖簾をくぐるオレと、同じく早足でオレの背中を追いかけてくる胡桃。訓夏がいなければ胡桃の暴走が止まらない。……いや、訓夏でもこいつを止めるのは無理か。

「どれどれ、キミの荷物の中を早速確認しようじゃないか」

確認と言いつつ、早速邪魔をしてくる。

せめて部屋に持っていくまで我慢することはできないのか。

「やめれ」

「エロ本は入っているのかな」

「入ってねえよ」

「え……何故？」

「何故じゃねえっ、入ってなきゃおかしいって面^{つら}でオレを見るんじゃない！」

オレは悲しいです。

「ところでキミ、私はまだ感想を聞いていないのだが」

「感想？　なんのだよ」

「それは勿論、美人姉妹の姉の方に架織乃家を案内されて非常に充実した一時^{ひととき}を過ごすことができたか否かについての感想に決まっているじゃないか。まさか黙秘するような甲斐性の無さを発揮することはないだろうねえ？」

なるほど、そういうことか。

しかしまあ、無駄に長い言い回しをする奴め。

「此処はいいところだと感じた」

「それだけ？」

胡桃は物足りなそうな視線をぶつける。

まだ、何か言っていることがあるだろう、と自身を指さしながら何度も頷きかける。

「……はあ、そうだな、可愛い訓夏と美人な胡桃と一つ屋根の下で過ごすことができて、オレはとても幸せですよ。……これで満足か、胡桃？」

「よく出来ました。はなまる」

「そりやどうも」

満足げな笑みを浮かべる胡桃を見やり、オレは肩を竦める仕草で対抗する。それぐらいのことしかできない自分が情けない。一度でいいから、胡桃を口で言い負かしたいよ。

するとそこに、第三者が姿を現す。

「——今の、本当ですか？」

「うおつ、訓夏か。いつからそこにいたんだよ」

いつの間にか、オレのすぐそばに訓夏が潜んでいた。……表現としてはおかしい方に聞こえるかもしれないが、それは決して間違っていない。足音も、呼吸する音も、全く聞こえなかったからな。訓夏、お前は忍者か暗殺者か。
アサシン

「……？ わたしは、いつも比喩のすぐそばにいますが……」

嬉しいんだけど、地味に怖い。

「それよりも比喩、今の言葉は本当ですか？」

「ん？ 今の言葉って言う……ああ、訓夏と胡桃と一つ屋根の下で過ごすことができて幸せだ、って台詞のことか？」

「違います。そうなんですけど違います。大事な部分を省かないでください」

大事な部分ってなんだ。訓夏は何が言いたかったんだ。

訓夏はというと、口をもごもごさせて、今すぐにでも答えを言いたそうにしている。なんか可愛いな。見てるだけで幸せになれそう

な気分だ。……ん？

「……あつ、思い出したぞ。可愛い訓夏と、美人な胡桃！ これだな、訓夏？」

その通りです、と何度も頷く。

カクンカクンッ、と壊れた玩具みたいにずっと頷く。……だ、大丈夫か。

「二度も私のことを美人と呼ぶとは……キミ、さては私に惚れたか？」

「惚れてないから」

胡桃の口撃をさらりとかわし、オレは訓夏に視線を向ける。

「で、それがどうしたんだ？」

「……う、なんでもないです」

オレの言葉を合図に、ピタリと頷くのを止める。

なんだ、オレはまた機嫌を損ねるようなことを言ってしまったのか。

「釣枝、キミは本当に愚か者だね。……だが、それでいい。キミはそれでいいのさ。私のくんかたんは誰にも譲ることはできないのだからね」

かつこいいことを言っただつもりなのか、胡桃は口の片端を上げて笑ってみせる。

いや待てよ。そういえばさっき、訓夏は大事な部分が抜けていると言っていた。それはつまり、訓夏と胡桃に？可愛い？と？美人な？という単語を付け加えることであって……。

「あ……、ひょっとして、可愛いって言われたかったのか？」

「死ぬがいいです」

「いぎやあああつ」

足のつま先を踏まれた。手加減なく、思いつきりだ。

手足が出る訓夏と、口が達者な胡桃に、今からでも変更させていただきたいっ。

「さあて、今日はキミも長旅で疲れただろう。私と二人っきりでお風呂にでも入り——」

「遠慮しておくっ」

脈絡のない話題を振ってくるんじゃない。しかもこんな状態で訓夏を怒らせるようなことを言うな。訓夏の視線が物凄く突き刺さっているのをどうかしてくれ。

「それは残念だよ。ではキミの背中を流すだけで我慢してお——」

「言い回しを変えただけで内容がまるで変わってねえだろうがっ」

訓夏、頼むから胡桃を止めてくれ。

「それも嫌かね？ ……ふむ、なるほど。つまりキミが言いたいの、は、私とくんかたんと三人で体を洗いっこしたいというのだね？ だが如何せんくんかたんの体、もとい全ては私のものだ。キミには譲らぐふっ、くんがっ、たんっ、……腹を、殴るとは……っ」

訓夏のボディーブローが炸裂した。

胡桃め、妹を怒らせた罪をその身を持って味わうがいい。

「ぐ、くうっ、だがこれも……くんかたんによる仕打ちと考えれば、脳内細胞的に快感へと変化させることも私にとっては容易い……と……だと、いいなあ……あふっ」

片膝をつき、ギブアップ。時間差で痛みが襲ってきやがったな。

「っていうかオレの足を掴むなっ」

顔を上げることすらできずに、胡桃は首をふるふると頼りなさげに横へと振ってみせる。

そこまでしてオレをからかいたいのか。その執念というか情熱には誰も勝てそうにない。

「比喩、お姉ちゃんほつといて散歩に行きます」

くいつ、とTシャツの裾を引っ張り、更には袖口を掴んだ訓夏は、暖簾の向こう側へと連れて行くとする。……え、オレも一緒に行

くのかよ。

「いや、あのよ、まだ荷物を――」

「散歩に、行きます」

「はいっ」

こちらを振り向きもせず、有無を言わさぬ口調でオレの意見を却下した。極力、訓夏には逆らわないようにした方が良さそうだ。怒らせなければ可愛いんだけどな。いや勿論、怒ってふくれっ面になった訓夏も可愛かったがな。……オレは何を言ってるんだ。

「く、くんかたん……、私をおいて、男と……出て、行くというのかね……っ」

「……っ、お姉ちゃんは無言で寝ててください」

最後の最後まで、胡桃は役者魂を前面に押し出しながらオレと訓夏を見送った。

なんていうか、まあ、胡桃が訓夏のことを大好きだったのは十分理解できたよ。そして訓夏も、恥ずかしそうにしつつ胡桃のことが好きだったことも同じく。……だよな？

「――で、此処は何処なんだ？」

訓夏に手を引かれて、と言っても実際に手を繋いだわけではなく、袖口をガッチリ掴んで離さない訓夏に引きずられていた、と表現した方が正しいか。兎にも角にも、今現在のオレは、お昼時とは到底思えないほどに真っ暗な森の中にいます。

「森の中です」

「うん、そうだな。見れば分かるぞ」

淡々と返事をしないでくれ。言葉数が少ないと心細いじゃないか。こんな森の中で二人つきりになると、まさに襲ってくれと言っているようなものだ、とか考えてしまいそうになるオレはやはり変態か。だが残念だな、オレは確かに変態だが、変態の中でもエリート

中のエリート、変態紳士なんだ。いきなり女の子を襲うような真似は多分しないぞっ。

「……比念、よだれが出てます」

「はっ!？」

いかんいかん、危うく手遅れになるところだった。

「あと少し、我慢してください。もうすぐ着きますから」

好からぬ妄想を抱いたオレに危機感を抱いたのか否かは定かではないが、訓夏がぼそりと呟いた。散歩に行くと言っていたが、どうやら目的地があつたらしい。

真つ暗な森の中に、な。

それからもう暫く無言で歩き続けていると、やがて祠のようなものが見えてきた。

「なんだあれ？」

「神社です。岩屋山の」

「岩屋さん? ……ああ、岩屋山ね、此处が」

一瞬、あの神社には岩屋さんという方が住んでいるのかと勘違いした自分を過去に消し去り、すぐに言葉を返す。

「……ふう、着きましたね」

鳥居をくぐった先には、お世辞にも立派とは言えない神社が待ち受けていた。

此处に来るまでに感じたことだが、参拝客は皆無に近いつてことかな。石段には苔が生え、ぽつぽつと備え付けられた電燈も寿命により明かりを灯さなくなっている。

だが、澄み切った空気が疲れを癒してくれるような気がした。地元の人たちからすれば、岩屋神社は穴場的なものなのかもしれない。密会だとかデートだとかするにはもってこいの場所と言えよう。現にオレ自身も訓夏と二人っきりでデートのようなものをしているわけだからな。訓夏的には現状をどのように解釈しているのかは知らないが。

「此处に、比念を連れてきたかつたんです」

「オレを？」

はい、と頷き、訓夏は神社に近づいていく。

訓夏はふすまを開いて、スカートのポケットから可愛らしい柄の財布を取り出す。

参拝する人が少ないのか、賽銭箱は奥に仕舞われていた。その隣には、小さなお盆の上にむき出しになったおみくじが無造作に置かれている。人がほとんど訪れないとはいえ、不用心にもほどがあるぞ。

「さあ、一緒にお参りしましょう」

訓夏は賽銭箱へと歩み寄り、五円玉を握りしめた手を緩める。硬貨が弾かれる音が聞こえ、賽銭箱の中へと消えていく。オレも訓夏に習い、財布の中身を確認。あいにくと五円玉を切らしていた。一円玉を五枚で許せ。

「ほつ、と」

小銭が弾け合い、オレの生活費が五円減った。この代償は高い……わけないか。

一円玉を五枚と引き換えに、オレは訓夏と二人つきりになる権利を得たんだから大満足だ。胡桃の悔しがる顔が目に見えかぶようだ。

訓夏が鈴を鳴らし、二人揃って参拝する。たった五円で願い事をするのも図々しいかもしれないが、さて何をお願いするべきか。

とりあえずこれから三年間、架織乃家を追い出されることなく平和な日々を過ごすことができるように祈っておこう。

「……比喩、思い出しませんか？」

隣から声が聞こえ、オレは目を開ける。

訓夏がオレの横顔を見上げていた。

「思い出すって……何をだ？」

「あの日交わした約束ですよ」

訓夏の口から出てきた言葉、それは？あの日交わした約束？のことだ。

その台詞が何を意味するのか、さすがのオレもすぐに理解するこ

とができた。

今日、訓夏と再会した時、約束を覚えていないのかと言われた。きつと、訓夏はそのことを言っているんだろう。

「あの日、比念とわたしは、此処で約束を交わしたんですよ」

「此処で……」

過去にオレはこの神社に来たことがあるらしい。

言われてみれば確かに見覚えがあるような気がしなくてもない、とはやはり言えないか。

残念なことにオレの海馬は訓夏との約束をきれいさっぱり忘れちまっているようだ。

「……す、すまん」

面目ない、と頭を垂れる。その姿を見やり、訓夏は眉根をひそめた。

これでまた訓夏のオレに対する評価のようなものが急降下することになる。既に地面すれすれまで落ち切っているかもしれないが、そこよりも更に下へと落ちていくだろう。

「本当に……何も思い出さないんですか？」

オレが嘘を吐いているんじゃないかと疑っているのか、もう一度だけ問いかけてくる。

だが、何度も聞かれようが申し訳ないことにオレの答えは同じだ。「ああ、本当に思い出せないんだよ……」

子供のころの記憶というものは非常に曖昧だ。忘れてしまっても、決しておかしくはないだろう。しかしだ、仮にも約束事を交わしたわけだから、それなりに記憶が残っていても不思議ではないわけだが、何故全く思い出せないんだろうか。

「……もしかすると、比念が持つ力に関係があるのかもしれないね」

「オレの力って……接触反応のことか？」

こくりと頷く。その表情は至って真面目で、訓夏と交わした約束を覚えていなかったことを怒ってもいない。

「わたしには、特に何もありませんでしたけど……、比念は力が強すぎて、数珠で抑えてたって言うてましたよね？ 代償とか、副作用とかで……バ力になったんじゃないかと」

「真面目に話を聞いていたのに、最後にバ力って言われるとは思わなかったぜ」

「それは事実ですし……」

「だから真面目な顔でさらっと言わないでくれっ」

女の子の前だけど泣いてもいいかな。悲しすぎて視界が潤んできた。

「思い出せないなら……仕方ないですね」

はふう、と可愛らしい溜息を吐いて、訓夏は視線を逸らした。

交わした約束を思い出しさえすれば、訓夏にこんな顔をさせることもなかったんだよな。

そう考えると自分が憎い。全治一週間ぐらいの傷なら負っても構わないから、多少強引にでもいいから思い出しやがれ、バ力野郎。いったい何のために脳みそが詰まってるんだよ。

「でも、それならそれでいいです」

くるりと半回転し、訓夏は背を向けて呟く。どんな表情をしているのか定かではないが、今の台詞には落胆した様子がなかった。俯き加減だった顔も、これでもかと空を見上げているじゃないか。……首、痛くなるぞ。

「比念が思い出してくれるまで、わたしはずっと待ってますから」
「——ッ」

ドキリとした。

言い終わると同時に、訓夏はこちらを振り返り、年相応のあどけない笑みを浮かべてくれた。それがあまりにも可愛くて、愛くるしくて、思わずオレは……抱きしめた。

「ふにゃあっ!？」

猫のような声を上げたのは訓夏だ。

不意を突かれ、オレに抱き着かれて驚いたんだろう。抱き着いた

オレも自分に驚いている。いきなり女の子に抱き着くなんて、まるで変態だ。……いや、実際そうなんだけどな。

「っ、なっ、……あう、そっ……な、なにを……ひね、するです……っ」

「ごめん、抱き着きたくなっただけ」

素直に、自分の気持ち伝えてみる。

今のオレはたとえ訓夏に殴られたとしても本望だ。

「そっそそそっそんなこ、とをつ、言われても……っ」

急な展開に頭がパニックに陥っているのか、訓夏は全身に力を入れて硬直している。手が出ることはおろか、足すら出なかった。その代わり、時間差で攻撃されることを予測しておかなければならぬいな。

ゆっくりと、オレは訓夏から手を離していく。

オレの体が、訓夏の体を、訓夏の全てを、名残惜しそうに欲している。……もう一度抱き着いてもいいかな。

「訓夏って、いい匂いがするんだな」

抱き着いた時、女の子らしい甘い香りがオレの鼻孔をくすぐった。匂いに敏感なだけあって、訓夏は自分自身の匂いにも気を使っているんだらうか。

「そっ、そ、……ですかっ？」

訓夏はというと、未だ目の焦点が合わずに、ぐるぐると色んなところを見ている。その頬は真っ赤に染まっていた。訓夏の様子を見ていると、もしかしてまだ何が起こったのか理解していないんじゃないだらうな、と疑ってしまいたくなる。まあ、それはそれで可愛らしい反応でいいんだが。

「訓夏と交わした約束についてだけどさ、悪いけど今すぐには思い出せそうにない」

「……は、はい」

「だけどよ、時間はたっぷりあるんだ。これから三年間、オレと訓夏と、ついでに胡桃も、一つ屋根の下で過ごしていくんだからさ」

オレの言葉を聞いて、ようやく訓夏が覚醒する。というか元に戻る。

「そうですね……、ゆっくり思い出せばいいです。比念が思い出してくれるまで、わたしは待っていてあげますから」

そう言って、訓夏は再び笑顔を作り出す。

「……あ、やっぱりもう一度抱き着いても——」

「死にやがれです」

恥ずかしそうに毒舌を返し、訓夏はオレの手の甲を捻りやがった。結局、最後は機嫌を損ねるんだな。女の子の機嫌ほど取りづらいものは存在しないってことか。

だが、訓夏と交わした約束は、思いのほか早く思い出すことになる。

そう、たとえば今夜とかにでも——…

【幕間（くんかたん劇場？）】

【幕間（くんかたん劇場？）】

「……あ、やつばもう一度抱き着いても——」

「死にやがれです」

恥ずかしさを紛らわすために、比念のリクエストに対して毒舌で返す。その代わりに、手を握るぐらいのことは許してあげてもいい——と思っていたら、いつの間にか手の甲を捻っていました。……はあ、なんでこんなことをしちゃったんでしょう。

あわわわあわあわあわああああっ、比念に抱きつ、憑かれた！抱き疲れた！抱き着かれたっ！夢じゃありません、これは現実ですつ、事実ですつ、真実ですつ、幻なんかじゃありませんつ、比念がわたしに抱き着いたんですつ！

ありがとう！ありがとう！全国のわたしと比念を応援してくれている方々、今まで本当にありがとうございました！これでわたしもあの頃から一歩どころか二歩前進したようなものですよ！まさか比念の方から抱き着いてくるとは思ってもいませんでした。しかもつ、聞きましたか？いい匂いがするっていいい言いましたよ！わたしの匂いに比念はメロメロになってしまったんですね、分かりますっ！でもそれも仕方のないことです、あの日約束を交わして以来、匂いに敏感になったわたしは、いっどこで比念と再会しても恥ずかしくないように毎日毎日自分の体を念入りに洗っているんですからねっ！

どうですか、比念。わたしの匂いに脳髓が刺激されましたかっ。

できれば一度目に抱き着いた時に言ってくれば更に大満足だったんですけどね。でもでも、わたしは十分満足してますよっ、だってあの比念が自ら率先してわたしに抱き着いてくれたんですから！

何度も言いますが比念がわたしに抱き着いたんですっ。

この変態ッ、変態ッ、警察に突き出されなくなかったらもっとう抱き着きやがれですっ！

そしてわたしも抱き着きますっ、変態ですからっ、当然ですっ！昨日までのわたしは比念に会いたくて会いたくて我慢できなくても我慢してやっぱり我慢できなくてももう全身がどうになっちゃいそうな日々を送っていましたけど、今日からわたしはもう何も我慢しなくてもいいんですっ、だってすぐそばに比念がいるんですから、会いたい時に会いに行くことができます！顔を覗きに行くことができます！寝顔を覗き見ることができます！監視カメラをつけるのも……いやいやいや、それはさすがに比念が恥ずかしがるかもしれませんね。だからまだ我慢しておきましょう。まだね。

それに勿論、比念がわたしの部屋に遊びに来ることもあり得ます！うっん、今の言い方は間違いですね。あり得ますじゃなくて確定事項でした。わたしが認めた比念はドがつくほどの変態さんですから、わたしの部屋に忍び込むことなんて造作もないでしょう。ベッドの下に、タンスの中に、押し入れの中に、机の中に、わたしの後ろに、枕の裏に、色んなところに隠れてわたしを視姦するに決まっています！

変態ッ、変態ッ、でもそれが変態という名の比念なんですっ！

だからわたしは我慢します！なすがままされるがままなんですっ！その過程でわたしとの約束を思い出すも思い出すかもしれないのであれば何度でも何度でもわたしは比念の要望に応えてしまうでしょう！拒否権なんて存在しません、わたしが持つ権利は比念の全てを迎え入れる権利だけですからっ！

そうです、そうですとも、比念が言っていたように、これから先、比念とわたしには時間がたっぷりと与えられているんです。約束を

思い出すことは前提として、それから後のこともドキドキしながら待っていないければなりませんね。

我慢できなくなった比念が我慢していたわたしを強引に押し倒して我慢できなくさせられたりするのとは日常茶飯事になるはずですから、楽しみにしておきますよっ。

はふう、なんだかこれから先のことを考えていたら夢也希望も胸も膨らみますね。そういえば比念は胸が大きな女性は好きなんでしょう？ あの頃に比べてちょっと大きくなりすぎたんですけど、もし比念が「貧乳はステータスだ希少価値だ！」的なタイプの趣向の持ち主だとすれば胸を小さくする手術をするしかありませんね。勿論そんなことをすればお姉ちゃんから「嫌味か？ 嫌味かねそれは？」と言われるのは必至ですけど、わたしと比念の幸せを考えてくれるのであれば当然納得してくれるはずですから問題はありません。まあ、比念がわたしの胸を好きだと言ってくれれば丸く収まりますからね、機会があれば聞いてみるのもいいかもしれません。好きだって言うてくれれば、好きなだけ、その、触っても……いいんですからね。比念限定でっ！

「やあ、やっと戻ってきたね。待ちくたびれてしまったよ」

岩屋神社での一件から数十分後、オレと訓夏は家に戻っていた。

裏口から家の中に入り、店内へと顔を覗かせる。すると待ってましたと言わんばかりの表情で胡桃が出迎えてくれた。オレが架織乃家を訪ねると同時に店の入り口を閉めたくせに、現在進行形でレジカウンターの前で店番をしていやがるじゃないか。

黒で統一された肘置き付きの上等な椅子に座ってふんぞり返っているが、普段からこんな態度で店番をしているとすれば随分と偉そうな店員もいたもんだ。たとえ責任者だとしても、もう少しどうにかならないものか。

「キミはくんかたんを連れて何処に行っていたんだい？」

「言っておくが、オレが連れて行かれたんだからな」

「ははは、そんなことはどうでもいいよ。何処に行っていたんだい？」

訓夏のこととなると口調の端々に棘が出てきやがるな。

「岩屋神社に行ってみました」

助け舟を出したつもりなのか、訓夏が一步前に出て質問に答える。それからオレの顔を見上げて、どうだ、と言いたげな視線をぶつけてきた。……何がだよ。

「岩屋神社に？ ……ふむ、まあいいさ。だがその代わり今夜はキ

ミの部屋で寝か——」

「断る」

「——せてもらわなくてもいいかな、と言いたかったのだが断られたので一緒に寝ることにしようじゃないか」

「臨機応変な奴だなお前は」

「それが長所さ、キリッ」

先程、訓夏にボディーブローを喰らったのをもう忘れちゃったの

か、胡桃は普段の調子を取り戻していた。まあ、大人しいよりはこっちの方が断然胡桃らしくていいけどな。

「ねえ、コトネー、クンカ帰ってきたのー？」

と、ここで第三者——じゃなくて第四者の声が暖簾の向こう側から聞こえてきた。

「誰か来てんのか？」

「キミとくんかたんが旅に出ている間に、新たな旅人が一人迷い込んでん——」

「スイの声です」

胡桃の台詞を遮り、訓夏が返事をする。

訓夏の顔を見て、それから胡桃へと視線を移してみると、案の定、胡桃は口元をへの字に変えて無言の抗議に訴えていた。……だが残念かな、訓夏は気付いていない。

「スイって、訓夏の友達か？」

「そうです。同じクラスで同じ研究会の仲間ですよ」

同じ研究会っていうと、つまりTCG研究会のことか。最近の女子中学生はカードゲームに嵌る奴が多いのか、それともオレの知り合いだけが特別なのか。よく分からんな。

訓夏が暖簾をくぐると、快活そうな声が響く。スイって子の声だ。まだ顔は見えないが、声だけを聞いてみても明るそうな子だったのは理解できた。

ご尊顔を拝するために、訓夏に続いて暖簾を捲り、居住スペースへと顔を覗かせてみる。

「——うわっ、男だっ」

丁度、階段を下りてきたスイがオレの顔に視線を向けて口を開いた。

「クンカ、家の中に男が入ってきてるよっ、追い出さなくていいの？」

まるで汚らしいものを見てしまったかのようなお言葉をありがとう。初対面でそんなことを言われたのはこれが初めてだ。

「大丈夫です、あれは変態なところを除けば無害ですから」

「つまり変態ってことじゃんつ、そばにいたら妊娠させられるよ、早く離れてっ」

「ごもつともな意見だ。しかしながら女の子のそばにいただけで妊娠させられるような残念なスキルはあいにくと持ち合わせていないものでな。命拾いしたな、小娘め。」

そして訓夏は、もう少し否定の仕方をどうにかできなかったのか。

「あ、あー、えっと……」

声を掛けるべきか否か、眉根を寄せて悩んでいると、その様子を見た訓夏がオレの手を引っ張り、スイの前に立たせやがった。

「手を握ったってことは……本当に、無害なんだ？ その人……」

珍獣か、オレは。

二人のやり取りが理解できないオレはおっさんになってしまったということか。

「現役女子中学生の会話が理解できない思春期真っ只中の現役男子高校生に説明しよう」

「のわっ、いきなり現れるんじゃないやねえっ」

いつの間にやら、オレの隣には胡桃が姿を見せていた。

瞬間移動能力でも持つてるんじゃないだろうな、割とマジで。

「くんかたんはね、学校でも随一の男嫌いとして有名なのさ。自分には大切な人がいるから体に触れていいのはその人だけなんだー、ってな感じでねえ」

そりやまた同じ学年の男子たちにとっては残念な話だな。と言っても中高生が異性に触れ合う機会なんて早々訪れることはないからあまり意味はないだろうけども。

「ん？ でもオレはいいのか？」

首を傾げ、訓夏に質問する。大切な人がいるなら、オレも訓夏には触れたらいけないことになるわけだからな。

連動するかのように、胡桃とスイも視線を向ける。

一瞬、視線を逸らした訓夏は、唾を飲み込み、オレの質問に答え

る。

「……比念は、これから三年間、一つ屋根の下で過ごすことになる人です。触れ合わないで過ごすことなんて不可能ですから」

「ああ、だから我慢してくれてんのか」

「死んでくれますか」

「なんでっ!？」

時々だが、会話が成り立たないことがあります。これが女子中学生の力か。恐るべし。

「おおおお、身長高いね、この人。何センチぐらいあるの？」

とここで、黙って話を聞いていたスイが声を掛けてきた。

「オレか? ……えっと、百七十二センチだったかな……」

中学生の、それも女子からすれば高い方かもしれないけど、同級生と比べれば頭一つ身長が高かったりするわけでもないからな。

「おおー、すっげー高いね。ボクより二十センチも高いんだ!」

「いやそれほどでもないけどな」

何がそれほどもないのか自分自身にツツコミを入れたいところだ。

……つて、ん? 今、この子、自分のことを? ボク? つて言わなかったか?

「ボクもね、同級生の中ではそれなりに身長が高い方なんだけどさ、でもやっぱり男子の方がものすごく高いんだよね」

「へ、へえー、そうなんだ……はは。ところで、スイちゃん……だっけ?」

相槌を打ち、会話を切らさないように、さり気なく話の方向転換を試みる。

「ん? そういえばまだ自己紹介してなかったね」

そうだったそうだった、と思いだし、推拿はコホンツと小さく咳をする。

「変態のお兄さん、初めまして。ボクの名前は倉紫屋推拿くらむら すいなって言います。コトネーには上の名前で呼ばれてて、クンカにはスイって呼

ばれてますっ。あと、それとね、ちゃん付けは恥ずかしいから、気軽に推拿って呼んでくれればいいよ！」

ニコツと微笑み、右手を差し出し握手を求める。……ああ、なんて無垢な笑顔だ。胡桃とは真逆の性格をしていそうな子だな。変態のお兄さんって言われたけど、相手が推拿なら速攻で許そうじゃないか。むしろもっと呼んでくれっ。

短髪黒髪の推拿は、スポーツが大好きですと主張しているかのように焼けた小麦色の肌と、爽やかな笑顔を惜しげもなく披露してくれる。意地悪なところなど微塵も感じさせない人懐っこそうな素振りと喋り方は、恐らくは同級生のクソガキ共の心を掴むには苦労しないことだろう。人を疑うことを知らないであろう純粋な瞳を向けられると、逆に推拿を苛めてみたくなるのは変態の性^{さが}って奴か。

先ほど述べたように、身長はオレよりも二十センチ低い。だが、女の子としては平均並みではないだろうか。因みに胸の大きさについてだが、服の上から見た感じでは平均的なんじゃないかと変態紳士たるオレは推測する。体格的には多少小柄だが、しかしながらすらつとした脚線美は舌なめずりしたくなる——おっと、誰か来たようだ。げっ、訓夏ッ。

「視線が厭らしいです、比念」

「オレは中学生に欲情しませんっ」

そうだぞ、決して欲情したわけじゃない。ただ、推拿の胸や足を見ていると云々……。

「オレは釣枝比念。今日から架織乃家に居候することになった高校一年生だ。よろしく」

推拿の手を握り、がっちりと握手を交わす。しかし何故かな、今この瞬間、どこからともなく殺気を感じているんだが。どうか気のせいでありまっすように。

「それで、ボクに何か聞きたいことでもあるの？」

手を離れた後、推拿は背中^に手を回し、少し前かがみ気味にオレの顔を見上げた。

いちいち仕草が可愛いな。訓夏に匹敵するんじゃないかな。

「あ、……そうだったな」

自己紹介が終わり、いよいよ本題へと突入する。と言ってもオレが個人的に興味があるだけなんだけどな。

「推拿はさ、えつと……自分のことを？ボク？って呼んでるのか？」
「えっ」

直後、ピクリと体を反応させ、推拿の目が点になった。

……あれ、オレって奴はまた変なことを聞いちまったのか。

「キミ、くんかただけでは飽き足らず倉紫屋までも辱めようと言
うのかい？」

「何がっ！？」

ちよつと待て、オレは別に推拿を辱めたつもりはこれっぽっちも
ないぞ。

「比念は最低ですね」

「なにこのアウェー状態！？」

誰でもいいから状況説明を求む、早急に！

焦点の合わない目をオレに向けていた推拿は、ようやく目を覚ま
したのか、おずおずといった感じで言葉を紡いでいく。

「ボク、……あの、ボクって……変かな？」

「全然ッ、むしろさいっこう！」

即答。これが紳士たる返事の仕方だ。さいっこう！

訓夏と胡桃の視線が痛いのは我慢しよう。だからせめて足を踏む
のは止めてくれ。

「そつ、そうかな……？ 同じクラスの男子にはさ、女子が？ボク
？って言うのはおかしいって言われるんだよね」

そんなことはない、とオレは推拿の頭を優しく撫でてやる。その
刹那、またもやオレの背を射抜くかのような殺気が向けられた。な
んだこれ、怖いんだけど誰ですか。

「それはそいつらがまだ若いからだ。あと数年経てばそいつらも理
解できるよ、推拿という存在がどれほどまでに希少価値のある女の

子なのかということな！」

「力説しているところ悪いのだがキミ、変態がすぎるぞ」

胡桃にツツコミを入れられるとは思わなかった。

多少、顔を引きつらせつつ、オレは推拿の頭から手を引いた。

「そっか、なんかよく分からないけど……変態のお兄さんはボクのことを笑わないでいてくれるんだねっ、ありがと！」

くそっ、推拿の心が穢れなさすぎて真っ直ぐ見ることができねえっ。

変態紳士の主張を最後まで聞いてくれただけでも御の字だというのに、そればかりか、お礼までしてくれるなんてどうすりゃいいんだよ。もう一度、頭を撫でてやりたいっ。

「ど、どういたしまして、はははっ」

だが残念なことに、此処にいるのはオレと推拿だけではない。変態的な行動を取ることは不可能だ。今はまだ大人しくしておくのが吉だ。……もはや変態じゃなくて犯罪者か。

「……あー、ところで推拿は、今日は何か用事でもあったのか？」

話題を変えるべく、オレは適当に思いついたことを口にしてみる。

それが功を奏したのか、訓夏と胡桃の視線が推拿へと移った。

「そうだよ！ えっと今日はね、午後からクンカの部屋で研究会の活動をする約束をしてんだ。ほら、デッキケースもちゃんと持ってるよ」

なるほど、研究会の活動か。

そういえば訓夏はTCG研究会に入っているんだっただな。そのメンバーのうちの一人が、推拿だったってことか。

「へえ、推拿もカードゲームで遊ぶんだな」

女の子がカードゲームで遊ぶっただけでも相当珍しいのに、まさか学校でTCG研究会なるものを作るほど熱心に遊んでいるとは恐れ入る。行動力がある奴らだよ。

カードゲーム人口の男女比は圧倒的に男性が多い。

そんな中で、身近に二人もカードゲームをしている女性がいるな

んてレアなケースといえよう。しかもそれが女子中学生なんだから価値も倍増つてもんだ。

「変態のお兄さんはしないの？ カードゲーム」

「んー、昔は遊んでただけど、今はもう止めちゃったんだよな」

「卒業したんだ？ そっか、残念だなー」

遊び相手が増えると期待していたのか、推拿は大きな溜息を吐いた。体全体を使って、ガツカリした様子を表現している。

「……もしかして、あれができるからですか」

「ん？ ……ああ、まあな」

横から声を掛けられる。どうやら訓夏は気付いたらしい。居間にいた時はまだオレの能力を説明する前だったが、今なら訓夏だけでなく、胡桃も気づくことができるだろう。

接触反応を行使できるようになって以来、オレはカードゲームで遊ぶのを止めた。山札をシャッフルする道程において、どこに何のカードがあるのか視ることが可能であり、場合によっては相手の手の内を読むことすら不可能ではない。気付けば地元で不敗神話を打ち立てたほどだ。

勿論、代わりに失った代償も大きかった。オレがあまりにも勝ちすぎるために、次第に気味悪がつて陰口を叩くようになったり、表面上では仲良く振る舞っていても、裏ではオレのことを化け物扱いするようになっていた。それならワザと負ければいいじゃないかと考える奴もいるだろうが、一度でもカードゲームで遊んでみれば理解できるはずだ。

絶対に勝てる勝負にワザと負けるなんて、絶対に不可能だってことがな。

勝ち負けのあるカードゲームにおいて、相手に勝つということがどれほど気持ちのいいことか、そして相手に負けるということがどれほど悔しいものなのか。

オレがまだガキだったってこともあるが、それでも人間って奴は勝てるなら勝ちたいと誰でも思うはずだ。

まあ、友達がなくなるのは自業自得だったから構わないさ。だが、カードゲームの美点でもある駆け引きを楽しむことができなかったことで、オレは心の底からカードゲームを楽しめなくなっちゃった。

だから、止めた。たとえ勝つことができても、楽しくもないもので遊び続けるほど詰まらない時間潰しは存在しないだろうからな。

「さっき遊びに来たらコトネーしかいなかったからさ、クンカの部屋で待ってたんだよ」

「そうでしたか、それは悪かったです」

岩屋神社まで散歩に行っている間に、入れ違いで推拿が遊びに来たってことか。

しかし春休みにも活動するとは随分と熱心な二人だな。というか、ただ単にカードゲームで遊ぶのが楽しいだけかもしれないけどな。それはそれでオレとしては構わないが。

「部屋に行って遊びましょう。……と、その前に着替えてもいいですか？」

そう言われて改めて気づいたが、今ここにいる四人の中で、制服姿を披露しているのは訓夏ただ一人だ。……いやいや、ちよつと待てよ、そもそも訓夏は何故制服を着ているんだっただけ。確か部活で学校に行くために……あれ？

「なあ、訓夏。部活は……午前中に終わったんじゃないのか？」

「言ってますでしたか？ 午前中は生徒会の仕事で学校に行ってたんです」

「生徒会？ 訓夏は生徒会に入ってるのか」

「虹ヶ丘中学校と高校はだね、二年次の成績上位者が強制的に生徒会メンバーとして登録されるのだよ。くんかたんは学年一位の頭脳と可愛らしさと絶大なる人気を持つオールラウンダーであるからして、今現在は虹ヶ丘中学校の生徒会長に就任しているのさ」

補足情報として、胡桃が横から付け加えてきた。それに対してオレは、バカみたいに口を開けることで反応する。虹ヶ丘中学校と高

校にそんなシステムがあつたなんて初耳だ。自分が通う学校のことぐらいもつとよく調べておくべきだったか。

しかし今の話が本当だとすれば、訓夏には嗅覚と可愛らしさと愛くるしさ以外にも頭の良さまで備わっていることになる。神は二物どころか何物与えてんだよ。なんでもいいからオレにも寄せ。変態的なもの以外限定で。

「訓夏つて凄いな……」

「い、今頃褒めても頭を撫でさせてあげませんよ」

顔を逸らし、ぼそりと呟く。……なんだ、つまりこれは頭を撫でるってことなのか。

隣に視線を移すと、胡桃がニヤニヤしながらオレを見ていた。こち見んな。

「あー、よしよし……」

「っ、……う」

撫でろ、と言われた気がしたので、殴られるのを覚悟して訓夏の頭に手を置いた。

途端、訓夏は目を閉じて体を縮こませる。言葉にならない声を上げて、くすぐったそうに唇を動かしている。

全国の変態紳士の諸君、今此処に世にも可愛らしい生き物がいますよ！

訓夏の頭を撫でた時間、約三秒。これ以上続けると胡桃に嫌味を言われそうなので、渋々ながらも手を引つ込める。すると、訓夏がその手を名残惜しそうに目で追いかけていき、やがてオレに見られていることに気づき、頬を朱色に染め上げる。

くそっ、胡桃と推拿がいなければ絶対に抱き着いていたぞ。なんせオレは我慢できない変態紳士だからな。……色んな意味で最悪だな、それって。

「クンカ、早く遊ぼうよ」

「き、着替えますから、ちょっと待っててください……っ」

恥ずかしさを隠すかのように、訓夏は早足で階段を上っていく。

その姿を見上げてみるが、残念ながらスカートの中は見えなかった。
スカートが長いよ、訓夏。

【4 - 2】

「そんじゃあ、オレは今から部屋で荷物を整理するかな」

まだ時間はたっぷりあるが、そろそろ旧物置部屋に戻って荷を解く作業に取り掛からないと、あつという間に夜になっちまうからな特に、胡桃の話し相手をしていると時間の進み具合がとんでもないことになる。時間がいくらあっても足りないだろう。

だが、そんなオレの考えを邪魔する輩が、此処には当然の如く存在する。

「キミ、居候の分際で初日からそんなわがままが通用すると思っ
っているのかい？」

ガシツ、とオレの肩を掴み、意地悪そうに笑みを浮かべるのは、
言うまでもなく胡桃だ。

「……はあ、なんだよ？ 今度はなんなんだ？」

諦めにも似た溜息を吐き、オレは肩に手をやり胡桃の手を離す。

「今日からキミも我が架織乃家の一員となるわけだが、勿論、そう
簡単に居候を認めるわけにはいくまいさ。というわけであるからに、
これから一つキミに試験を行いたい」

「試験……？」

嫌な響きだ。そんな単語は学校以外で聞きたくないな。

反問すると、胡桃はくつくつと笑ってみせる。そういう笑い方だ
けは訓夏よりも似合うよな。当然ながら褒め言葉じゃないけどよ。

「さあ、こっちに來たまえ」

手招きし、胡桃は暖簾をくぐって店内へと姿を消す。

「なんか面白そう！ ボクも見学しよう」と

後に続けと言わんばかりに、推拿が元気よく暖簾にぶつかる。：

…せめてくぐるか捲れ。

「……はは、は」

湧いた笑い声を上げ、オレも二人の後についていく。廊下に突っ

立つても何も始まらないからな。

架織乃骨董屋の店内へと顔を覗かせてみると、既に準備万端といった様子の胡桃と、これから何が起こるのかワクワクしながらオレと胡桃に視線を向ける推拿の姿を確認した。

「遅いぞ、キミ。早くそこに座りたまえ」

偉そうな態度で店主専用の椅子に腰掛けた胡桃が、顎を上げて行動を促す。

「そこつてどこだよ。椅子がないぞ」

店内には、胡桃が座る椅子以外に存在しない。因みに、推拿は棒立ちだ。可哀想だからパイプ椅子でもいいから持ってきてやれよ。

「誰が椅子に座れと言ったかね、地べただよ地べた」

「てめーは鬼かつ」

「うん、知ってる」

にこー、つと意地悪く笑いかけてくる。

いや、胡桃が女でよかったよ、危うく手が出そうになるところだったぞ。

「……はて、キミは地べたに座るのは嫌なのかい？ まあそれなら仕方ないねえ、私の膝の上に座る権利を与えようじゃないか」

「マジで座るぞこの野郎」

「どうぞどうぞ」

一度でいいから試してみたいものだが、それを実行に移せば取り返しのつかないことになりかねないから我慢だ。……いや、既にオレは訓夏に抱き着いたりしてゐるから手遅れか。

「変態のお兄さん、座らないの？ そんなじゃあボクが代わりに座ってあげるね！」

「ちよっ、くらしやつ、——んごうふっ」

オレが拒否するのを確認し、それならばと推拿が代わりに立候補する。

胡桃に制止する間すら与えずに、推拿は思いつき飛び上がり、尻から強引に胡桃の膝の上に着地する。……ああ、あれは痛いな。

推拿の全体重が、モデル張りの細さを誇る胡桃の肢体に襲い掛かっている。オレをからかいすぎた末路がこれか。自滅とはまさにこのことだな。ご愁傷様、胡桃。

「ぬぐうつ、なにをしているんだね倉紫屋めい……今すぐ私の上から退けいっ」

「だが断る！ あははっ」

無邪気って、時に恐ろしいね。胡桃が苦戦する姿を初めて見たよ。ふぬぬー、と気の抜けるような踏ん張り声を上げながら、胡桃が推拿の尻を弄る。^{まさぐ}

「あひや、ひやあつ、コトネー、くすぐったいってばっ」

「退かぬ……ならっ、鳴かせてみせよ……う、女子の声……っ」

「あほか」

こんな状況でも何ら変わらぬ口調と態度を示し続ける胡桃にある意味感服しつつ、オレは推拿の手を引いて手助けをしてやる。

「くっ、……釣枝よ、これで貸し一つだね。この借りは私の体で払っ——」

「払わなくていいから、もう少しオレに対する態度を改めてくれ」

「おや、なんだね、キミは積極的に誘ってくる子よりも、素直な子の方が好みだったのかい？ ふむ、どうやら私は選択を誤ってしまったようだね。うつむ、果たして今からでも修正及び方向転換が効くだらうか……」

「ごちゃごちゃ変なことを言う暇があるんなら、さっさと試験つてのを始めてくれ」

相手をすることに疲れてきた。精神的にだけでなく、肉体的にも疲労が蓄積されているような気がするのには錯覚ではあるまいな。

「よかろうて。では……」

腕と足を組み、背もたれに寄りかかり、胡桃はオレと目を合わせる。

「釣枝、今日からキミは架織乃骨董屋の一員、すなわち働く人になつてもらう。だがそのためには今から行われる数々の難題、難関、

危険を乗り越えなくてはならない。それらを無事に制覇し、勇者として魔王討伐を果たしてみせることを私に誓いますか？」

「誓いません」

即、断りを入れる。これが胡桃に対する最善の一手に違いないかな。

「ノリの悪い奴だな、キミは」

「ノリが悪くて残念だったな」

ぷくーっと頬を膨らませた胡桃は、拗ねたような表情を作り上げる。

普通にしていればこいつも可愛いのに、つくづく勿体ない奴だよ。

「魔王討伐ならボクも一緒に行くっ」

「倉紫屋、キミは少し口を閉じているといい」

推拿は推拿で、人を疑うということをもっとしつかりと学ぶべきだ。いつかきつと悪い奴に騙されてあんなことやこんなことに巻き込まれちまうぞ。たとえば変態紳士な奴に言い包められて変態的な行為を求められる可能性も否定できないわけであって……いや、別にオレのことを言っているわけじゃないからな。仮定としては。

「このままグダグダしていても埒が明かないだろうからね、それでは試験を始めようか」

誰のせいで話が進まないのか一度じっくりと話し合いたいものだな。

とにかく、ようやっと試験なるものを受けることができそうだ。

「では、試験その一。我が架織乃骨董屋の店員というものは、接客において常に元気な声を出すことができれば私の部屋で私と共に毎夜を共にしなければならぬのは周知の事実「ちょっと待てい！（オレの声）」であります、ではそこでキミに与える試験についてですが、今から私が口にする台詞をとびつきり大きな声で復唱すること、それができるようになって初めて、キミは私と共に背中

の洗いっこが可能となるわけです。というわけで変態紳士のキミに

は理解できたかな？」

「成功しても失敗しても結末が変わらねえだろうが」

「えっ？」

なんだその真面目なことしか言つてませんよ的な反応は！ オレがおかしなことを言つてるみたいな構図になるから止めてくれ！

「まあ落ち着きたまえ、とりあえず試験をクリアしなければキミに明日はないのだよ」

随分と理不尽な意見だが、確かに一理ある。オレは架織乃家に居候する身分であるからして、家主を怒らせてしまつたり機嫌を損ねてしまうようなことがあれば、即刻追い出されることも無きにしも非ずだ。ここは大人しく従つておく振りをするべきだ。

「もうどうでもいいから始めてくれっ、オレは早いとこ荷物を整理したいんだよ」

半ばやけくそ気味に言い捨てる。これが演技ならどれだけ楽なところか。

「うむ、では復唱したまえ」

んんっ、と喉を鳴らし、胡桃がゆっくりと息を吸う。そして、

「いらっしやいませ」

まずは、簡単な挨拶から試験が始まつた。

「いらっしやいませ」

「いらっしやーい！ あははっ、お客がいないのにいらっしやいだつてー！」

オレと胡桃の真似をして、推拿も復唱する。

だが止めておけ、胡桃の眉間に皺が寄つたのをオレは見逃していいぞ。

「ありがとうございます」

「ありがとうございます」 「どういたしましてー」 たたつ、痛いよコトネー！」

胡桃が言い、それにオレが続いて、最後に推拿が返事をする。そして案の定、胡桃の足が推拿の脛すねにクリーンヒットした。

息を吹きかけて痛みを和らげようと試みるが、ギリギリのところ
で届かずに苦戦中の推拿を無視し、更に試験を継続する。

「チーズバーガーはいかがですか？」

「チーズバーガーはいかがで……って、んなもん売ってねえだろう
がっ」

「……え？ チーズバーガーじゃなくてスマイル一つ？」

「誰の注文を受けてんだよ！ んなこと骨董屋で聞かれるかっての
！」

「いいえ、オレの大好物は架織乃胡桃です」

「質問してたのオレ！？ っていうか勝手にオレの好物を決める
な！ しかもそれ食い物じゃねえからっ、お前だから！」

「食べちゃいたいです」

「だから何をだよ！ お前かっ？ お前のことかっ！？」

「むしろ食べてっ」

「もはやお前の願望的なものがむき出しになってるし！！」

「はい、ごうかくー。釣枝、おめでとう。キミは今日から架織乃家
の一員だ」

「なんかいつの間にか終わってたし！」

もう嫌だ、胡桃の相手をするのは懲り懲りだ。

牽制役の訓夏はまだ着替えが終わらないのかよ、待ちくたびれて
死にそうだぞ。

「推拿、お待たせしまし……なにをしてるんですか」

心の叫び声を通じたのか、暖簾の向こう側から訓夏が姿を現した。

……ああ、貴方が女神か。それとも救世主か。

「釣枝の調教を少々」

「ごほっ、ごふっ……、お、おいこら胡桃、初耳だぞっ」

思わず咳き込んでしまった。女の子に調教されるなんてオレはド
Mかっての。

っていうか逆に調教したい——おっと危ない、また誰か来たよう
だ。

「ははは、さて店番でもしようかな」

既に店は閉めただろうが。お前はどれだけマイペースな性格をしているんだよ、全く。

「待ちくたびれたよクンカ、早く遊ぼうっ」

推拿はというと、おあずけを喰らっていた子犬のように手足をパタパタさせながら、今か今かとはしゃいでいる。そんなにカードゲームで遊びたかったのか。

「あ、比念も一緒に……わたしの部屋に來ますか？」

「オレが入っても構わないのか？」

魅惑の訓夏ルームに男性の入室を許可してもいいのか。

いや、いいんだろうよ。そうでなければオレは一生入れそうになりからな。

「比念なら、あの……、いいですよ」

「そっか、それじゃあお邪魔させてもらおうかな」

顔を赤らめながら言うもんだから、こっちまで恥ずかしくなってくる。今のオレは確実に青春ってもんを満喫していることだろう。役得だ。

「くんかたんズルいぞ、私も是非お供させていただ——」

「店番してください」

「しゅん……」

声に出して言うな、胡桃。

たとえ本当に悲しかったんだとしても、そんなことをしたら演技にしか見えなくなるぞ。

「ふん、別にいいさ。私には骨董品という名の喋らない動かない額かない友達がわんさかいるのだからね、一人ぼっちになっても決して淋しくなどないのだよ。……チラッ」

「その眼はなんだその眼は」

オレの反応を期待するのは勘弁してくれ。

胡桃がそうであるように、オレも既に訓夏には頭が上がない状態なんだからな。

「ばいばい、コトネー」

恨めしい台詞を言い残し、我先にと推拿が走り出した。

これ以上、胡桃の相手をするのも疲れるので、悪いがオレも訓夏の部屋にお邪魔させてもらうことにしよう。胡桃は暫くの間そこで反省しておくといひ。

「うらぎりものめい、うぬぬう…… かくなる上は我が力を解放し……」

ブツブツと呟き声を上げる胡桃を無視し、そそくさと背を向ける。なんだか呪いを掛けられそうな声色が背中につけられたが、後ろを振り返ることなく訓夏と二人で店内を後にした。

二階に上がり、先ほどの案内では見ることでできなかった訓夏の部屋の前に立つ。

ドアは既に開いていた。部屋の中に推拿の姿を確認。こつちを向いて片手を上げる。

「クンカ、デッキ調整は終わってる？」

「勿論です」

床に座布団を三枚用意し、訓夏が腰を下ろす。ベッドに座っていた推拿は、訓夏と向かい合うようにして座り直した。

「比念も座ってください」

「おう、失礼しますと」

声を掛けられ、部屋の中に入る。

枕元には可愛いぬいぐるみが沢山置いてあり、訓夏の女の子らしさをより鮮明に映し出す。机の上には参考書の類がきつちりと並べられ、学年一を誇る頭脳は事実なのだろうということを実感させてくれた。

そして最後に忘れてはならないのが、訓夏の私服姿だ。

白と黒のチェック柄のショートパンツを穿いたまま座布団の上に正座する訓夏は、実に美味しそうな太もと膝小僧を見せつけている。これぞ役得と言わんばかりにじつくりと堪能し、愛でることが可能だ。

上はダークベージュに染まったフレアチェニツクを着ているが、服の性質上、ショートパンツが上手い具合に隠れてくれるおかげで、角度によっては何も穿いてないように見えないこともない。こいつは変態を興奮させる素質を十分に備えた着こなしだ。

「先攻はいただきよ、クンカ！ ドローッ」

推拿は手際よく山札をシャッフルし、床に置いてカードを五枚引く。更にその後、山札からもう一枚カードをドローした。

「この空気、懐かしいな……」

オレも昔はこの二人みたいに時間を忘れてバカみたいにカードゲームで遊んでたっけ。

同じ学校の奴らだけでなく、近くの公園で出会った名前も知らない他校の奴らや、いい年こいたおっさんとかと勝負したことも今ではいい思い出だ。オレがあまりにも勝ち続けるものだから、拳句には全国大会の地区予選なんてものに出場するべきだと担ぎ上げられちまって、断りきれなかったオレは接触反応を使いまくって県代表に選ばれたこともあった。……まあ、結局それは辞退したんだけどな。

「わたしのターンですね、ドロー」

推拿のターンが終わり、訓夏のターンが回ってくる。

二人の対戦がよく見えるように、オレは中央に座っている。どちらのプレイングスキルの方が高いのか楽しみだ。

「訓夏の手札は……へえ、そういうタイプのデッキなのか……」

まず、訓夏の横に腰をずらし、手札を拝見させてもらう。

風属性のカードで統一しているみたいだが、なかなか独特な能力を備え持ったカードを加えているみたいだな。一枚では役に立たなくても、二枚三枚と数を増やすことによって、爆発的な威力を誇るタイプの戦術を用いるであろうことが手札から読み取れる。

「人の手札を見るなんてエッチですね……羞恥プレイですよこれは……」

たとえ対戦相手ではないとしても、手の内を見られるのは恥ずか

しかつたらしい。訓夏にお叱りの言葉を頂いた。手が出なかっただけでもありがたいので、大人しく訓夏のそばを離れることにしようじゃないか。

「あ、……うう」

すると、オレが離れると同時に訓夏の右手が虚空を掴む。

何か言いたげな様子でオレを見るが、目が合ったかと思えば、すぐに視線を逸らされた。

「変態のお兄さん、ボクの手札なら見てもいいよ!」

「そっか? そんなじゃあ……」

あえて今まで突っ込まなかったが、ところで推拿はいつたいつまでオレのことを変態のお兄さんと呼び続けるつもりなのか。そもそも意味を理解して口に行っているのかすら怪しいぞ。そんなに何度も変態変態と連呼されたら何かヤバイもんが開花しそうだ。

「どれどれ……? ほう、推拿はその、なんていうか……うん、面白いデツキだな?」

としか言いようがない。

コンボだとか戦術だとか一切無視、それが推拿のデツキだ。

なんだろうな、これ。まるで自分の好きなカードだけを選択したかのような……。

「このデツキはねっ、かつこいいドラゴンだけを集めて作ったんだっ、ほら見てよ、このドラゴンなんておっきな角が生えててかつこいいでしょー」

「……うん、そうだね、ははは」

だが残念かな、コストパフォーマンスが高すぎるカードを投入しすぎているので、手札が事故を起こしている。これではユニットカードを召喚する前にやられちまうぞ。

「ターンエンドです」

推拿と話していると、少々強めの口調で訓夏がターン終了を宣言する。

なんか怒ってるように見えるけど気のせい……じゃないよな。怖

いから目を合わせないようにするべきか。いやしかし二人の対戦が終わった後でどんな仕打ちを受けることになるのか不安でもあるし、でもやっぱり訓夏に手札を見るなって言われたから近づくことはできないし……ああくそつ、とりあえず今は推拿の手札を見ておこうじゃないか。

「あのさ、推拿。このデッキってマジックカードとかトラップカードは入ってるのか？」

え、なにそれ？　とか言わないでくれよな。

さすがにそこまで初心者なわけがないとは思うが、仮にもTCG研究会の部員なんだからもう少し頑張ってデッキを構築して頂きたい。

「もっちゃん！　マジックカードが三枚と、トラップカードが二枚も入ってるよ！」

「少なつ、山札五十枚もあるのに十分の一しか入れてねえっ！」

変態のお兄さんは泣きたくなってきました。

何故に泣きたいのかと聞かれると、同じTCG研究会の部員たる訓夏が、デッキの構築の仕方を推拿到に教えていないってことが判明したからだ。デッキ、または手札を見ればある程度の構築技術は図ることが可能だが、推拿のデッキは初心者そのものだ。

好きなカード（この場合はドラゴンのカード）だけを選択して、デッキに加えるというあるまじき行為により、補助カードが圧倒的に不足しているのが現状か。

「なあ、訓夏？　なんで推拿到にデッキの作り方を教えないんだ？」

「教えました。……でも、ドラゴンが好きだの一点張りなんです」

下唇を噛み、自分は悪くないと訴える。……ああ、確かにそりゃ悪くないな。つまりは推拿が自分の意見を譲らなかつただけか。

「変態のお兄さんつ、横から口出しするのは禁止だからね？　正々堂々とクン力を倒すことに意義があるんだからさっ」

変なところで我が強いな。

しかし安心しろ、推拿。お前のデッキでは運が良くなければ訓夏

には勝てないぞ。

口出し禁止と言いつつも、推拿は自分の手札がよく見えるように角度を変える。

「訓夏が場に伏せてるカードが牽制である可能性もあるけど、そこをあえて攻撃しない手はないんだよ。攻撃して身、伏せカードを発動するならそれに対抗してこのカードを使えばいいだけだし、逆に発動しないのなら攻撃がプレイヤーに直接通るだろ？ しかもこっちは対抗するために手札を一枚減らさずに済むわけだ。つまりこの場面で一番やつちやいけない選択というのは、伏せカードを恐れて攻撃をせずにターンを終えるってことだ」

「凄いよっ、変態のお兄さんはただの変態じゃなかったんだね？」
それは褒め言葉と受け取ってもいいのかな。とにかく羨望的な眼差しを向けられているのは確かだ。それと同時に、訓夏が苛々しながらオレを見ている。

「変態のお兄さんもなかなか役に立つんだね！ そうだっ、どうせならボクたちの研究会に入ってみない？」

「なかなか役に立たせてもらったところ悪いんだが、オレは既に高校生なものでな、中学生の研究会のメンバーにはなれそうにない」

ロリコン野郎として通報されたくないからな。……いや、でもオレと推拿は歳が一つしか変わらないんだよな。しかも高校生が中学生といちゃつくのはロリコンって呼ばれるんだろうか。そもそもロリコンの定義が曖昧でどこからどこまでが……ってオレは何をバカなことを考えてるんだか。

「あー、そっか。そういえばそうだね、残念だよ。クンカより強くなるために都合のいい相手が見つかったと思っただけだなー」

「正直な奴だな、お前は」

女子中学生の都合に振り回されるのも案外いいものかもしれない。

「そうだっ、ボクの師匠になれば一件落着なんじゃないかなっ」

「いや待て、別にオレはカードが強いわけじゃないし、カードの種類から相手の戦術が読めるだけであってだな……」

なんだか変な方向へと話がずれてきた。このままではゲームを続けるのも難しそうだ。

「仕方ねえな……、推拿、余りのカードって持ってきてるか？」

「え？ うんっ、ストレイジボックスに入れて持ってきてるよ」

「よし、この対戦は中止だ、今から推拿のデッキを強化するぞ」

でも、と訓夏が呟く。恐らくは何を言っても無駄だと言いたいんだろう。

だがそんなことはない。ドラゴンが死ぬほど好きだって言うならば、ドラゴンを活かすことができるように構築すればいいだけの話だ。

たとえ大好きなドラゴンをデッキに投入しまくっていたとしても、それを召喚できなければ楽しさは半減するだろう。そこが推拿のミソだ。召喚することができるようになれば、多少はドラゴンのカードを減らしても構わないはずだ。デッキの容量が空いた分、ドラゴン系専用の補助カードをこれでもかかってぐらい詰め込んでやる。

「推拿、デッキを見せてくれ。それと余りのカードも」

久しぶりにカードに触れたオレは、遠い昔に感じていたカードゲームをする楽しさを思い出していた。やっぱりいいよな、どんなデッキを作ろうかと悩んでいる時ほど、時間の流れが速まることはない。たった一枚のカードをデッキに加えるか否か、それだけのために何日も費やすことがあった。その感覚を、オレは今再び手にしている。「これとこれはいらないだろ、んでもって……こいつは使えるから残すか、あとは……」

いつの間にか、オレを中心に訓夏と推拿が輪を作り、床にカードを並べ始めていた。

楽しい時間というもののはあつという間に過ぎていく。この空間に、もう一人誰が存在していたことを忘れてしまうほどに……。

「はろうはろう、デュエリストの諸君。長閑の午後をいかがお過ごしかな？ くんかたんの優しいお姉さまが麦茶を用意して颯爽と参上仕るよ」

が、やはり忘れさせてはくれなかった。

勢いよく部屋のドアが開け放たれたかと思えば、お盆にコップを載せた胡桃が仁王立ちしているじゃないか。タイミングを見計らわない奴め。

【4・3】

「店番はどうしたんだ？」

「我が分身に任せてあるから案ずる必要はないさ、釣枝」
誰だよ、分身って。

しかしまあ、喉が渴いてきた頃合いだったので丁度いい。たまには胡桃も人の役に立つ。

……随分と酷い言い方だが、胡桃なら「構わんさ、むしろもっと私を苛めたまえ」とか言つて喜びそうだ。

「ありがたく頂くよ」

返事をし、手を伸ばす。……そしてその手を払われた。

「キミ、お礼は？」

「……お前の耳は節穴か？ 今言つたよな」

「架織乃胡桃様ありがとうございます。このご恩は一生忘れません、と言いたまえ」

「このマゾ野郎がっ」

「おやおや、侵害だねえ？ キミにそんなことを言われる筋合いはないはずだよ？ 何故ならキミは「ハアハア……くんかたん可愛いよくんかたん……萌えー！」とか心の中で叫んでいるのだろう？」

オレの人格を勝手に作り替えるような発言は慎んでもらいたい。しかも今時「萌えー！」なんて叫ぶ奴はほぼ存在しないっての。

「バカか、そんなこと考えるわけがないだろ、いつたいどこの変態だよ」

「はて、キミは変態じゃなかったのかい？ 私はキミと再会して以来ずっとそのつもりで接してきたのだがね」

くそつ、ああ言えばこう言う奴め。

確かにオレは変態だが、それを胡桃に言われる筋合いはない。

「……」

「ん……訓夏？ なんか顔赤いぞ、どうしたんだ？」

「なんでもないです。喋らないでください、耳が潰れますから」
「ひでえっ！」

姉にからかわれ、妹になじられる。

これから毎日こんな日々を送ることになるのか。体が幾つあっても持たないぞ。

「さて、釣枝を使って遊ぶのも一段落したわけだし……」

「オレで遊ぶなオレで！」

このやり取りをどうにかしてくれ。

胡桃には疲れという言葉が存在しないのか。それともただのバカなのか。

「ほら、受け取るがいいよ」

麦茶の入ったコップを手渡され、一口飲んでみる。……よし、毒は入っていないみたいだな。勿論冗談だが。

「コトネー、ボクのは？ ボクのはないの？」

「釣枝が持つてるじゃないか」

その言葉に、思わず声が出た。

よく見りや胡桃は一つしかコップを持ってきていない。此处に居るのは胡桃を合わせて四人だったのに、たったの一つだ。

「みんなで仲良く飲み回せとも言つつもりか」

「おふこーす。さあ、キミが口をつけたコップを寄こしたまえ」

言うが早いか胡桃はオレのコップを強引に奪い取る。

「あっ、ズルいよコトネー！ ボクも飲むんだよっ」

「——うぬっ、零れるだろうが、止めたまえ倉紫屋……ぐぐぐっ」

波打つ麦茶の行方を目で追いかけていると、視界の端に動く影を発見。……訓夏だ、訓夏が麦茶争奪戦に名乗りを上げやが——、
「あっ」

声を上げたのは、推拿だ。

胡桃の手からコップを奪うべく取っ組み合いを披露している最中、コップを持つ手の向きが斜めになり、飛沫を上げるかの如く麦茶が宙へと逃げ出した。

その先にいたのは、やはりと言うべきか訓夏だった。座布団から立ち上がるうとする訓夏の胸元に、麦色の滴が万遍なく浴びせられてしまった。

「う、うわぁ……」

やっちまった、的な声を上げて、オレは訓夏の姿を――凝視した！
麦茶に濡れた服が透けて下着のラインが露わになつて……いなか
った。くそっ、こういう場合は確実に見えるはずなのに何故だ！

「大丈夫か、訓夏？」

「びしょびしょです。……下着も」

鼻血出そう。

「クンカごめんっ、すぐに着替えた方がいいよ！」

「申し訳ない、くんかたん。かくなる上は私の下着を一式貸し――」
「それはいいです」

謝る時でさえ自分の欲に忠実な奴め。徹底しすぎなところがある
意味尊敬できるかな。

「シャワーを浴びてきます」

スツと立ち上がり、タンスの引き出しを引いて着替えを選び始める。

これはさすがに見ない方がいいだろう。女の子のタンスの中の秘密を知ってしまうば、オレは手遅れになりそうなことを仕出かしそうな気がするからな。訓夏の下着がタンスの何段目にあるのか、とか……。

「すぐ上がりますから、少しだけ待つててください」

着替えを見繕った後、訓夏はそれだけ言い残して部屋を出ていった。

訓夏の部屋に残されたのは、オレと胡桃、そして推拿の三人だ。
階段を下りる音が聞こえなくなるのを確認し、胡桃が肩を撫でおろす。

「ふふっ、冷や汗を掻いたのは久しぶりさ」

「お前は全然悪びれた様子じゃねえな」

「くんかたんの姉だからね」

それは理由になってない。

幸いなことに、床にはほとんど零れていなかった。つまり訓夏が全てを受け止めたってわけだ。訓夏自身は災難だったけど、部屋が汚れなくてよかった。

「……ああ、そうだ。私とキミは来週から高校生になるわけだが、せっかくなので二人で何か新しく研究会や同好会とやらを作ってみるのも面白いかもしれないね。どうだい、たとえば？ごみ屋敷同好会？とか」

ネーミングセンスが最悪にもほどがある。

「どんな活動するんだよ」

「ごみ屋敷で活動するのさ」

話を通じないのは毎度のことなので動じるな。

「だからどんな活動なんだよそれは」

「虹ヶ丘は中高一貫校なわけだからね、くんかたと倉紫屋の二人も強制入部させることにしようじゃないかね」

「強制なら仕方ないねっ、ボクでよければ入部するよ！」

そんな簡単に承諾しないでくれ。

このままだと、なし崩し的にオレと訓夏も入部することになっちゃうだろうが。

「別に参加するつもりはこれっぽっちもないんだが、とりあえず活動内容だけでも考えておかないと同好会ですら認定されないんじゃないか」

「そうだねえ、では人間として失格名存在である人たちが失格ではない人間になるためにごみ屋敷で日夜会議する同好会というのはどうかな？」

意味が分かん。日本語でok。

「よし、釣枝の了解を得たことだ。これで決定だな」

「待てい、いつオレが納得した！」

「はて？ …… 今だが？」

「お前の耳は節穴すぎるぞっ」

「私の耳が節穴ということは釣枝の耳は腐っているのかな？」

「頼むからまともに会話を続けさせてくれよ、胡桃う……」

もはや何も言う気にならなくなる。

まさか初めからそれを狙っていたんじゃないだろうな。相手が胡桃の場合、一度でも疑い始めたら灰色から白色になることは万が一にも有り得ないな。とにかく、このまま此処に居ては胡桃に弄られ続ける羽目になる。一刻も早く抜け出そうじゃないか。

「推拿、オレは今から実家から持ってきた荷物を整理する必要がある。だから暫くの間でいいから、胡桃と遊んでくれ」

「なっ、キミ——」

「うんっ、分かったよ！」

引き留めようと試みる手を振り切り、オレは訓夏の部屋から退散する。これでようやくツツコミ地獄から解放される。清々しい気分だよ。

「はあ、疲れた……」

溜息を吐くのも、これで何度目になることやら。

階段を下りると、目と鼻の先にオレの部屋がある。今日中に荷物を整理しておきたいところだが果たして間に合うだろうか。

「……おっ、訓夏？」

とここで、部屋の中に入ろうとした時、すぐ後ろからドアの開く音が聞こえてきた。

振り向くと、シャワーを浴びたばかりの訓夏が廊下に立っている。

髪の毛は濡れていないが、服装は一新されていた。

「え？——ふわっ」

二階で待っているはずのオレが此処に突っ立っていることに驚いたのか、訓夏は電撃が奔ったかのように体を震わせたかと思えば、足を滑らせバランスを崩す。

「危ないっ」

勢いよく廊下をダッシュし、オレは訓夏の許に駆け寄る。

手を伸ばし、それに反応した訓夏も手を差し出して来る。その手をギュツと掴み、もう片方の手を腰に回し、体を打たないように才しが回り込んで――、

「むぐっ!？」

キスをした。

「――ッ!！」

一瞬、何が起こったのか理解できなかったが、すぐに現状を把握する。

ヤバい、不運にも――否、幸運にも訓夏とキスをしてしまったようだ。

訓夏は、両目を限界まで見開いている。……瞬きするのが勿体ないと言わんばかりに、その瞳にはオレの姿が映り込んでいた。

「ご、ごめ……っ!？」

光の速度で土下座をして謝ろう、と考えたまではよかった。

だが、思いがけない幸運に舞い上がり緊張の糸がほんの一瞬ではあるが捻じれてしまったオレは、つい、やっちゃった。

訓夏とキスをした際に、接触反応を……。

「うゅゅゅっかひがmいあつっ!」

声にならない叫び声を上げた訓夏は、顔面を真っ赤にしていた。

オレの上から慌てて飛びのいたかと思えば、口をパクパクさせたまま視線を彷徨わせ、拳句にはオレを殴ることなく逃亡開始。

階段を全速力で駆け上り、自分の部屋に閉じこもろうと試みるが、あいにくと訓夏の部屋には胡桃と推拿が待ち構えている。

その結果、二階のトイレに逃げ込んで鍵を閉めやがった。

だが、オレは至って冷静だ。接触反応を行使したことによって、自分が今成すべきことを全て理解している。

「……訓夏に謝らなくちゃな」

キスをしてしまったことを謝らなければならない。けれども、オレにはもう一つ謝らなければならないことがある。それは訓夏と交わした約束についてだ。

接触反応を行使してしまったおかげで、過去にオレと訓夏との間に何があったのかを形だけとはいえ思い出すことができた。勿論、記憶の断片を覗き見たからといって、オレの記憶が戻るわけではないが、訓夏の記憶の中に映像としてしっかりと残っていたものは嘘偽りのない真実だ。たとえオレがまだ完璧に思い出すことができなかったとしても、あの日交わした約束のことを話すべきだろう。

「――なにを、謝るんだい？」

と、そこに、胡桃が姿を見せる。

いつの間に階段を下りてきたのか、胡桃はまるで階段を上らせまいとしているかのようにオレの前に立ち塞がっていた。

「胡桃、そこを退いてくれ。オレは今から訓夏に謝らなきゃならないんだ」

一步、前に出る。それでも胡桃は階段の前から退こうとしない。

「なにを謝るのかと聞いているのだよ、釣枝？」

優しくに語りかけるその姿は、今までに見たことのない胡桃を作り上げていた。

何かが、おかしい。そう思った。でも今はとにかく訓夏に謝ることが先決だ。

「思い出したんだよ、訓夏と交わした約束をな」

「……約束を、思い出した……だと？」

眉をひそめ、胡桃はオレの目を見つめる。嘘を吐いていないかと疑っているのかもしれない。だが、実際はそんなもんじゃなかった。

「――どこまで、思い出したんだい？」

胡桃は、どこまで思い出したのかと訊ねた。……何故？ どうしてそんな聞き方を？

「……いや、いい。答えなくとも別に構わんよ。どうせまたすぐに忘れることになるのだからね。ほら、こんな風に……」

「え？ ちょっとお前……ッ！？」

不意に、胡桃の右手がオレの顔に翳される。

しかし次の瞬間、オレの目に飛び込んできたのは眩いばかりの閃光に霞み取られる記憶の数々だ。つい先ほど視たはずの記憶の断片が、一つずつ姿を消していく。形を無くしていく。失っていく。

「我が家の話をした時、私が嘘ばかり吐いていたのをキミは憶えているかね？」

「な……なにを……言ってるんだ……」

手を翳されただけなのに、オレの体は嘘みたいに動かなくなっていた。

一体全体何がどうなってるんだよ。

「あれはだねえ、キミを騙すためのフェイクなのさ。……ほら、言ってるだろう？　くんかたんにはあるが、私には何の能力も備わっていない無力な人間なのだとさあ……？」

背筋が凍りそうになるぐらい、胡桃の姿は恐ろしく見えた。

何か得体の知れない行為を目の当たりにしているかのように――
否、これは現実だ。

「最後に一つだけ教えておいてあげるよ、釣枝。私が得た能力、それはだね……」

ラック・オブ・メモリー

「記憶の欠落――他人の記憶を自由に欠落させることのできる能力さ……」

まがいた
「瞼が重い。徐々に意識が遠のいていく。」

せつかく思い出したのに、オレはまた強制的に忘れることになる。今、何が起きているのかを理解しているのに、それを止めることができない。記憶の一つ一つがゆっくりと壊れていくのを実感するしかない。

……でも、何故だ。

胡桃は何故、オレの記憶を欠落させるのか。

思考しても明確な答えは導き出されない。たとえ真実に辿り着い

たとしても、同じことだ。どうせまた胡桃の手によって忘却させられる。

「なん、で……そんな顔を……するん、だ……っ」

霞が掛かり、目の前が真っ暗になる直前、オレは悲しげに微笑む胡桃の顔を見た。

どうして泣きそうになっているんだ。オレの記憶を消すのがそんなに辛いことなのか。

「……釣枝、キミは何も知らなくていいのさ、……そう、なんにもね……」

耳元でそつと呟き、喉を震わせる。

心を覗かれたくないのか、顔を見られないように隠してしまう。

やがて、オレは完全に目を閉じる。暗闇に支配された世界で、最後に届いた言葉――、

「おやすみなさい、ひーくん……」

ああ、これもまた忘れるんだろうな――…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7529x/>

あなたの匂いが嗅ぎたいっ！

2011年10月31日18時00分発行